

川柳の雄証

麻生路郎★主宰



十一月號

Pensez fuir trans la land-lim

りとびきに

美び顔が水す



の等虫京南・蚊・蚤  
! 時いユカで虫毒

然こういふ時ときにも不思議ふしぎなほどよく効ききますので、  
殊ことに小ちひさいお子こ方なたのある御家庭ごかていなどには殊ことの外重ほかじゆう  
寶ほうがられてゐます。  
★ニキビ吹出物ふきだものに非常ひじょうによく効きくので  
大評判だいへうばんの薬くすりです。ニキビや吹出物ふきだものでお  
困こまりの方かたに大おほきな喜よろこびの糧かて!  
お勸すすめたい薬くすりです! ぜヒ

ニキビ

是	吹	ニ
非	出	キ
此	物	ビ
薬	に	.

阪大・京東

館天順谷桃

# うたがりあ！んさ隊兵

## (六) 戦争

戦争がいつまで続くかと云ふことを問題にしてゐる人がある。百年は續きまッせと云ふ人がある。まことに愚な話である。戦争と云ふものは人類の生存してゐる限り續くものなのである。それは話が大きすぎると思ふ人は、その人が生れて死ぬまで續くものと思へば大した間違ひはない。それを疑ふ人は戦争の潜行性に就て考へたことのない人である。

## (七) 胃袋

自由主義經濟時代の胃袋は總てが享樂的でだらしがなかつた。にぎりは何處ぞこのオヤヂが握つたのでないか食はないかと、何んとか彼とか贅を云つたものであるが、近ごろでは何處ぞ何が何うの斯うのと云ふやうな胃袋は一切シャットアウトされてゐる。

## 漫筆 後銃のひ句

＝ 贈へんさ隊兵の線戦 ＝

健全再想の胃袋から見ればまことに痛快至極の現狀である。従つてどんな貧弱な醬司屋の醬司でも劇的にイエースオーライである。

背な掻いた手でおつさんの握り醬司 (自由朗)

と云ふシロモノでも、何等の抗議も申込まないで、おとなしく頂戴してゐる。頂戴してゐると云つてもロハでないことは云ふまでもない。それに食時時間はいつてもよろしいと頗ぶる寛大なおゆるしが出てゐるにもかかはらず、そんなことは舊體制で

あると稱して、醬司屋さんの方で自膳し、既定の時間が来るとサツサと切りあげてしまふ。これは戦時下の食糧政策に協力した醬司屋さんの日本精神のあらはれであつて、斯くしてこそ、豊葦原瑞穂の國の米の確保が出来る譯なのである。

しかし、いやしんほで、だらしない、機會があれば闇でも喰べたいと云ふ胃袋を、ここまで秩序ある統制へ導くと云ふことは係官の涙ぐましい努力がものを云つてゐるのである。その間、醬司だけでは本と云ふ胃袋もあれば、少しは揮ひれなくして明日の働きが出来ないといふ胃袋もゐるのである。

いよゝますゝ、胃袋の統制は強化されつゝある。イヤ捷つための統制は經濟學者の説を俟つまでもなく一段と強化しなければならぬのである。どんなものでも食へる、どんなもので食ふと云ふ胃袋の存在は、パンのみに依存してゐる米英にとつて一大脅威でなければならぬ。すこしく話が堅くなつたが、家庭に於ける胃袋の状態を報告することしよう。

家庭の胃袋へは、すべてキツアップ制によつて、食糧品が配給されることとなつてゐる。日目の總菜はモンベ姿の或はエプロン姿の上は夫人、令嬢から下は女中さんに至るまでが、配給所と稱する看板下に營業する商人の許へ足を運んで配給をうけるのである。このために二三時間を要することは各家庭の大きなやみではあるが、漸次改善されつゝあるといふことであるから、やがては明朗迅速な制度に改められるであらう。た

だ一つここに愉快なことは各隣保へ配給される品々は、と云つても一時に幾種類も配給するやうな、だらしないことはほしいのであるが、貧富の別なく、同一の品が、各家庭の胃袋の數に應じて配給されると云ふことである。従つて今まではダイヤモンドでも喰べてゐたやうな顔をしてゐた金持の奥さんでも、長屋のお神さんでも同じ玉葱、同じ豆腐、同じ薩摩芋を召し上がることとなつたのである。これは長屋のお神さんたちの、常ひごろのひがみごろを匡正するだけでも、胃袋の統制の大きな力だと云はねばならない。同時に隣のおぢいさんの胃袋にも、向ひの娘さんの胃袋にも、今日は肉が何ん外這入つてゐるんだアと云ふことを想像し得ると云ふ朗景は配給がもたらした豫測せざる笑となつたのである。(路郎生)

## 不朽洞句抄

麻生路郎

孫のある年で校正係長  
驛長も助役も菊が好き  
と見え  
染直しあの手この手も  
知れたもの  
閑居ではないが一二羽  
飼うておき  
ワイシャツを脱ぐのが  
見える隣組

## 川柳雜誌 十二月號目次

表紙 (初冬)……………福井晋撮影

漫銃後のひ句……………路郎生……………(一)

「とき」の話……………鈴木石鹿……………(七)

武玉川研究 (三篇)……………梅本 聖山……………(三)

草木徒然……………西田 柳葉……………(三〇)

初等川柳講座 (一〇)……………麻生 路郎……………(三)

電車の中で……………右井白面人……………(三〇)

鼻……………老婆たばこラツシュ人……………河野 夜王……………(二)

車掌……………谷口 綠水……………(二)

卵で乗る……………櫻川 不永……………(三)

さばかれた客……………武部香林坊……………(三)

隨筆見透しの話……………小山 文三……………(三)

川世 界 史 (二八)……………戸田 孤蓬……………(三)

斗風逝く……………小畑自有浪……………(三)

近頃アメリカ異聞集……………武部香林坊……………(六)

吾 寺 行……………武部香林坊……………(六)

不朽洞句抄……………麻生 路郎……………(一)

近作 柳 檜……………麻生路郎選……………(六)

川 柳 塔……………麻生路郎選……………(四)

同舟近詠……………諸 家……………(三)

一 素 足……………前田 五健選……………(四)

集 日 記……………魚住 滿瀧選……………(五)

各地 柳 壇…………………………(七)

川協・柳界展覧……………(六) 編輯椅子……………(六)

社關係の人々…………………………(三)

# 武玉川研究

(二二四)

梅 本 塵 山  
森 東 魚  
姪 子 省 二

## 五編 (六)

(89) 野、宮も志賀も昔の道具也

省二「道具なり」は奇抜な言ひ方。(古句には、よくあるが)野々宮も志賀も、昔を追想させられる場所であり、従てこの「武玉川」にも度々詠まれる場所である。

塵山「兩方ともに、屢々和歌の道具に使用される。」

東魚「昔を偲ぶ引合ひに、えてなるものだと云ふ心持ちを、「道具也」と興じたものと考へられる。

(90) 女のはたし貝を見らる、

省二「女がはたしで行くなどは、餘程の出来事であらうから。」

東魚「呆れて或は不思議がられて顔をみられる。」

塵山「夫婦喧嘩の果の家出かとも思はれる。」

(91) 女房の耳も足して置母

省二「娘が耳に入れた事をも、母親が併せ説くといふのか。」

東魚「女房の聞き込んだ事と、自分の聞き込んだ事も、共に母が小言の種とするのを、苦笑する心持ちであらう。(女房のやつ、あの件を母親に云ひつけやがったな……と苦笑するのであらう)。」

塵山「女房の耳に聴取した他人の説をも、母親が参酌して、後日の意見の材料にするといふの歎。」

(92) 地紙うり仕舞仕事に口が過

省二「仕舞仕事なので、聊か喋べり過ぎたのだ、地紙賣は少し己惚れ気味のあるものとして詠まれてある「地紙賣油壺から出て歩き」であるから。」

東魚「とんだ、のろけまぢりの事でも、口を迂らしたのか。」

塵山「昔の地紙賣には、多辯の奴が多く有つたらしい。」

(93) 辨慶も千人めに八食に付き

省二「千人目七ツ道具をらりにされ」て三世の奇縁、今より後は主従ぞと契約堅く結ぶ。辨慶に對し下五は面白し。

東魚「下五は矢張り「めしに付き」と讀むのであらう。  
塵山「辨慶の千人切に就いて疑問があるけれども、此句にそれを述べる必要がない故何にも云はぬ。」

(94) 敵かしてすたるけいせい

省二「敵が知れた爲に、今迄利用されてゐた傾城も役拂ひとなる。講談もの。」

東魚「小説めいた句で、得てある筋と云ふ處に、穿味もユーモアもある。」

塵山「前説の如く、小説の筋を借用した句である。」

(95) 盆に小豆の音の吉日

省二「初花祝。  
東魚「普通の祝ひ日の趣とみてよろしからう。  
塵山「賛成。」

省二「限定の要なき事後に氣づく古川柳には「吉日は盆に小豆の音すなり」とある。」

(96) 蘆間の鶴の陽炎を喰

省二「芦間といふと芦の延びた季(秋)の感じが強い様に思ふが、此句は陽炎だから春だ。蘆の芽吹く折りだ。その芦間に鶴が下りた風景は洵に繪の如き春らしさである。」

東魚「つのぐむ芦と云つて、芦の芽を吹く頃も春らしい趣である。芦間に春の光あまねき様、誠に長閑である。」

ある。  
塵山「赤人の「芦邊をさして鶴なき渡る」の古歌を暗に踏んだ句だと思ふ。」

(97) 妾の里てうまひ事言ふ

省二「そが妾の里らしい。口上手である。」

東魚「妾の實家の人柄が思はれる塵山「うまい事を言はれる人は誰であらう。」

(98) 縮着かへて居ハるすい物

省二「着物を着替へて、氣輕になつて、膳につく。」

東魚「湯上りに、さらりと縮を着て膳に向ふ。すい物は初手に出る品で、凡てがすがすがしい趣。」

塵山「上等の割烹店で、酒宴の前に、先づ一風呂といふ態であるらしい。」

(99) 貧乏神の譽る芍薬

省二「牡丹を福貴草と云ふから、對應して貧乏神を持出したわけ。「芍薬は牡丹の上に立たん事」其他この花は好く詠まれてゐない。木本と草本の差を認めねばならず、私は芍薬も大に好む。許六の百花譜をみよう。  
東魚「たゞ相對したものの同士にひての、軽い洒落にすぎまい。  
塵山「支那では牡丹を花王と稱し芍薬を花相と稱する程で、決して貧

乏とは云へぬのである。

(100) 開度に鳴らぬ鼓は聲を響

省二 鳴らぬ鼓では響めにくい。然かも聞く度びには掛聲でも響め申さねば。(鼓が本當に鳴るには餘程の稽古がいる)。

東魚 鳴らぬと云つても、然るべく鳴らぬのであらう。

塵山 主公の鼓の稽古するのを、傍から三太夫が響るのではない歟。

(101) しのふ山屏風の思も覺えたり

東魚 忍ぶ戀路に、屏風と云ふ有難いものがあると、心持ちであらう。

塵山 上五の「忍山」は、中七の「屏風」に、能く附かぬやうに思ふ。

省二 「武玉川」には、「忍ぶ山」なる言葉を用ひた作が、非常に多い前に「笠にしてあふない所を袖の思」

もあつた。「袖笠はとぎれ／＼を忍ぶ山」(武・十八)など詠まる。

(102) 少ツ、たまる面白い桶

東魚 「ちとつ」と讀ませるのであらう。塗桶を用ゐる綿摘が、小遣取りをするとか云ふのか。或は雨漏りを受ける桶の場合か。

塵山 綿摘の器具は塗桶といへど單に桶とはいはぬ。此句の桶は芋を綜む時に使用する芋桶のことで、「少つゝたまる」とは、俗に云ふ「卷子線錢」のことを云つたものである。

省二 私には、この桶が判らなかつた。「面白い」とあるので、其含蓄を探るべく熟考したのだが。

(103) 背中たゞけ埃のたつ乳母

省二 乳母にもいろ／＼ありはするが、いかにも、まめに働いて居る

事が、背中に埃を浴びて居るので判る。乳母氣質が出て居る。

東魚 働いてゐる事が分ると云ふよりも、私は背中を叩かれた場所が小供を守してゐる日向だと云ふ氣がされる。

塵山 乳母とはあれど、勞働をする農婦のやうな感じがする。

(104) 吉原の灯を見て歸る烏打

省二 烏打が切り上げて歸途につく。廓の灯がちらほらと眼に入る。人様々。世間様々。

東魚 烏打と云ふのは、烏を追ふために傘様のもので逐ひ拂ふのであらうか。さすれば、埒もない仕事をする者と、彼等にとつては夢の世界ではない吉原の、對照に興がありはする。

塵山 烏打と稱する職業が有つたであらう歟。私は聞いた事が無い。



窓

薬といふ葉がスツカリ落ちて、桶が鈴なりになつてゐるのを見ると、その美しさをいかに感ずる。秋を懐ふ。(不死鳥)

# 新發膏

## 消炎鎮痛濕布薬

# 粉末木木木

工木ス姉妹品

C-PE19

主治効能 感冒、肺炎、肋膜炎、  
氣管支炎、扁桃腺炎、中耳炎、  
ロイマチス、神經痛、打撲痛、  
捻挫等

今般工キホス姉妹品として發賣したる本劑は専らその藥効竝に持續時間の永続に留意して製造せるものにして用法も至極簡便、安全なる粉末濕布藥なり  
一、本劑は長時間使用出来るやうに工夫してありますから持續時間は任意にして支差へありません

包装 100瓦、500瓦、1000瓦、2000瓦



# 塔 柳 川



—選 郎 路—

野道山徑食用の草を採り  
炭焼きに焼方を聞くハイキング  
トランクもなし満洲の北支への

大阪橋本緑雨

九月六日三男健一生る

橋濱 福田山雨樓

豫定日に來た陣痛にただ祈る  
悠久な日よ赤ん坊欠伸する  
四十五の妻戦時下の授り子  
關東で生れた強さ育てたき  
隣組リレ一のやうに子が生れ

尾崎 奥村丹路

盗人の來さうな晩の秋となり  
戀はかくあるべし待ちほけ待ちほうけ  
その日くきれいにくらしもの忘れ  
漫畫にもならず子の留守を夫とるる

張家口 岩崎柳路

マスゲームさして健康な喉佛  
マスゲーム動きをカメラから覗き

戸屋 寺井銳々

下駄箱のこぼろぎ聞いて待たされる

子澤山夕日の當る膳もあり

高野山

老夫婦避暑とは云はず高野へ來  
見送りへ國民服で父の佇つ  
月に向く女ひとり淋し過ぎ

大阪 大西八歩

コンデ・ベルデ號にて伯國より妹歸朝す(二句)

歸朝して土を嬉しいものに踏み  
説明にちとひまがいたる第二世  
寝姿があほらしなつたコムパクト  
牛の眼に俺が鋤いたる稻實る

桃太郎(三句)

取り上げた桃へ洗濯忘れたり  
老の身へ生甲斐のある子が生れ  
桃太郎以後鬼が島耕され

大阪 戸田孤篷

古戰場その街道をバスが來る  
祝辭祝辭紙の節約など思ひ  
女生徒のわかれ録音してみたし

兵庫縣川西町

戸倉普天

同僚が死んで淋しい五十過ぎ  
八時丁度次席も机へすべり込み  
誰一人乗らんでもバスは出て行つた

尾崎 水谷鮎美

絹針がひかつて嫁の氣がはれず  
帯芯はよれく女ごころかも

そろばんの要るほど母の金の嵩  
ワイシャツの破れ氣にせず飲み給ひ  
鶴あるく動物園に秋の風

新聞紙上の「日本の母」を読む

日本の母は素直に寫される

歸還して暫し鼻突く如き路地  
干雑魚を御寮人さんもつまんでみ  
顔見せぬ友は古典を究めるとか

★

妻のぐち素直にきいて寝てしま  
常會へ猫だいて行く顔なじみ  
共稼ぎもちろんですとよい覺悟

驛辨を喰ひつゝ覗く稻の出来  
山口縣小郡町 長野井蛙

子澤山帽子を靴を辨當を  
村上角堂

彈劄を持つ身靜かに歛かつぐ  
女房と事のおこりは昌なり

戰塵を拂ふ良人を見上けたり  
大阪福井 哲

童心も乗せて模型機舞揚り  
見晴しもよく分讓の杭もあり

瓜の蔓瓜でよしよく太れ  
小川靜觀堂

日本の銃後へ捕虜は肩を貸し  
人生五十轉廢業のやむなきを

候補者にひきあはされる歸還兵  
阿母のてがみ源氏をよむやうな

山の宿南洲平八希典の書  
三國の誓ひは固く稻の出来

歌舞伎座の一等席へ借り浴衣  
尾崎 長谷川三司

我橋こんな所に風があり  
残置燈をこだけ雨が強く降り

頭數よんで高座は雨を褒め  
大阪野元吐空

或る日龜を天王寺に逃がしに來  
入營の附添ふ母の若くして

代書屋は抱え火鉢で事件聞き  
相續稅拂つて親の恩を知り

東條首相民情觀察  
奉天吉田水車

村童の頭へのびる閣下の手  
或時の首相は夏の草に伏し

高粱のさへぎるものもなくのびる  
瀟湘國建國十周年

なか／＼釣れんそれを見てゐる橋の上  
大阪須崎豆秋

これやこの猿澤のトトウまそうな  
交番の机にすゝきおみなへし

色街で冴えないものは夫婦づれ  
ハイル宮岡白峰

明日は征く君と見てゐるノモンハン  
川維九月號を拜見して

軍刀のまんま誤植も見つかり  
故雅幽を偲ぶ

軍装の僕へ別れとなつたのか  
九月十一日初雪

鼻髭も凍れと雪も散つてくれ  
毛布一枚明日の體を休ません

おの／＼のいろを揃へて秋といふ  
松本石曾根民郎

流れきて墓場の秋をさがすなり  
想ひ出の人多くみな月のなか

鐘ひとつ身に泌む秋はそれ／＼に

大阪 正木水客

久し振り歩けば水も秋になり

月光に何不足なく街ねむる

木の葉虫造化の神に笑へてき

あくまでも象はサーカス風に出来

名曲かんしよう女の鼻を見てるたり

人格がどうのこうのと落ちぶれて

奥行のある裏庭は萩に沿ひ

無我夢中でやつてゐますと第一報

片腕に綱帯をして負けてゐず

かたちんばの下駄で常會にぎあはせ

丸刈の無口な程が尊とかり

未亡人なに不自由なく美しい

配給へ藝妓も來てる晝の風

喧嘩して出掛ける女化粧する

晩婚はホテルで披露するときめ

つけ口をするは一番末子なり

タイピスト詩集を寫す音をたて

港の灯夫が後からつけて來る

信號を待つ間に馬は他見する

鈴ふつて馬も故郷の山を發ち

子子の沈みおくれたあはてやう

限りある生命へ慾を何故すてぬ

一幅の繪となる狸檻を這ひ

食べ過ぎで寝てムニースをみんな聞き

二十四時制で長男生れて來

昭南發特電君の顔浮ぶ

無線技師K君の昭南出張

大阪 北川春巢

大阪 丸尾潮花

豊中 黒川紫香

運命と諦めるにはちと若く

子を抱いて屈託のない女人像

ヘアネット義理にも似合ふとは云へず

他をほめて自己を語らぬ流行醫者

展望車歴史教へる走り方

うらぶれて鼠小僧を讀む身なる

誰に訊いても知らん／＼といふ鉢

夕立は土の匂ひをかゞすなり

雨洩りの音間隔があり氣が悪し

乳牛はゆうゆうゆうと寝をべつて

龍頭まき／＼講演とりかゝり

他人の爲に生きてるやうなていさいや

髭剃つて秋の空氣にふれるなり

出征へ知らぬも帽子脱つて行き

營門をくゞり覺悟の身の輕し

甲、甲、甲、干城の列に並んだり

今更に少尉の偉らさ教へられ

英靈が故山に歸る發車ベル

掛軸は掛けつばなしで秋深む

鯊釣りに子の激勵を受けて出る

慰問しに行く女事務薄く塗り

出張の意味を子供に覚えさせ

簡素化へ机の配置變ること

豊穰の秋へ案山子が少しゆれ

貨物驛勝てる東亞の姿なり

襦袢干して日本の幸思ふ

大阪府 西尾 栗

大阪 田中風葉

廣島 濱田久米雄

大阪 好崎申仙

大阪 魚住 滿 潮

一身上某大官は椅子を去る  
新人盪頭、頭山翁からハガキ来る

さて来ればよう来たと云ふ顔をしせず

拾圓を貸した昔を恩にきせ

遺児位ひ取つてやろうと云はぬなり

西宮 西川 愁 水

暑いとも言はずコツクはあけてゐた

豊作と言ふ顔してゐる案山子たち

若き日の感激今は傷痕の身

大阪 中内 翠 芳

無いく、と言ひつゝ、馴染に賣つてゐる

店員の親切振りに一つ買ひ

讀經の合間に聞いた虫の聲

下關 多田市 多樓

干城となる日我が子の肩の中

津波来た通知故郷へ氣をとられ

頑張つてきたとも云へる足の豆

岡山 逸 見 灯 竿

子を叱るついでに親も叱つとき

謙信にあらねど鹽を送りけり

空閑地鼻緒が切れて遂に脱ぎ

買物が終つて午前中終り

乳母車中古なれど止むを得ず

白黒の手へいらく、と受話器持ち

履けさうにない下駄母は緒をたてる

大阪 夷 一 笑

一人旅秋の西口の驛に降り

道後にて  
ほつちやんのその後は知らずに湯ひたり

角帽と洋書懷疑を懷疑する

かまきりの色さへ秋は枯てゆき  
トンネルの向ふも秋の村でした

椿姫みたいに妾死でゆき

利にうとい伯父であつたと通夜の席

落葉せり南の方は如何です

口紅にその根性があらはなり

洗髪けんのしようこが吊つてある

振向けばお能に似たる洗髪

泣く兒の尿を向ける名月

モンベ服處女の美しさは捨てず

商人の耳の鉛筆いつか無く

たゞ貰ふ様に牛肉百匁買ひ

長女 誕生

二貫二百親の切符をみな使ひ

大牟田 高田 抱 逸

献納へ鐘の相場を考へず

往診の會釋もせずに座り込み

還曆の町會長と氣が合はず

居ることは居るなと鱈を釣り上げる

下關 國 弘 半 休

常會の月へお茶なとたてようか

地球儀の前で時局を聞く廣さ

理科の蟲捕へて夏の山を降り

西宮 河 萬 々 的

田を走る汽車で農民論をきく

感傷に似てコスモスの揺れ止まず

大阪 谷 川 綠 雨

遅刻して社長と同じバスを降り

冗談をさみしく聞いた二階借

無事ですと髭をはやした寫眞くる

尼崎 小林 文月

觀心寺志道講習會

孝子談 青年やはりシンとする  
模型機が一枚割りし窓ガラス

大阪 河野 夜王

父の遺金を蓄めよとあらざりし  
これだけの英語は讀める倉庫番

再婚の父母の意見のまゝで行く

尼崎 飯尾 寄與史

醫者へ行くための早退とは淋し  
濕布した車掌に時間聞いてゐる

大阪 浪 玲之介

嘘はあんた斯ふ言ふ風に教へられ  
馬鹿野郎と言度い日なり山に對す

教養が人を殴れぬ腕にする  
寢姿はもう高僧のそれならず

賞め過ぎてマアいやらしい人にされ  
體位向上夜半の汽車に揺れて居り

立小便する程酒を飲んで居す  
漫才に暫く主義を捨てに行き

名月や奈良石段の多過ぎて  
企業合同成り新會社設立

合同は成れり一年振りの月

西宮 谷 口 綠 葉

辨當代忘れた頃に渡される  
水槽へ働く働く灯が映り

大阪 武部 香林 坊

一身上の都合だなんてべらぼうな  
話すほど判らなくなる個人主義

人口比率で買った魚か知らねども

布施 上 田 翠 光

世辭一つ云はぬのれんを慕うて來  
コスモスが大きくゆれたかくれん坊

津山 河田 一 將

商才にたけて素足の美しく  
歌謡曲戀の甘さを絞るやう

大阪 井 上 湧 三

阪大卒業式に臨み

送辭答辭どれも日本の色となり  
虫ついた小豆へ騒ぐ休閑地

畔豆に生活力をみせられる  
一寝入りして見る月は馬鹿に冴え

大阪 八 竹 正 柳

天高し短靴の紐しめなほし  
中年の情炎に似て柿實り

轉業をしたか貸家になつて居る  
ラッシュアワー大學教授も押し込まれ

中傳と聞くなるほどの娘の素振り  
ゴムの來る話を子供大將する

京都 明 石 柳 次

待避所にチンチロリンが啼いてます  
呑みに行く机ばたく、仕舞はれる

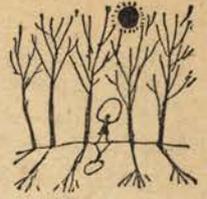
堺 麻 生 ア ー ト

錆び釘を伸ばしてゐるも日曜日  
アパートの煙も立てず暮れてゆき

汽車の煙家郷を知らぬ顔へ來て  
自己紹介兵役までも云ひそへる

ネクタイの少し紅いが氣にさはり  
コンサート古い牧師に出逢ふなり

豚皮の靴を鳴らして朝を出る



# 「とき」の話

鈴木石鹿

愈々二十四時間制の實施を見ることになつた。考へれば今迄の午前午後の制度は、明治五年十一月九日、太陽曆の採用と同時にあつたのだから、約七十年の生命だつたわけだ。その時の御布告中「時刻」に關する部分を抄出する

一、時刻之儀是迄晝夜長短ニ隨ヒ十二時ニ相分チ候處今後改テ時辰儀時刻晝夜半分二十四時ニ定メ子刻ヨリ午刻迄ヲ十二時ニ分チ午前幾時ト稱シ午刻ヨリ刻迄ヲ十二時ニ分チ午後幾時ト稱候事  
一、時鐘之儀來ル一月一日ヨリ右時刻ニ可改事但是迄時辰儀時刻を何字ト唱來候處以後何時ト可稱事  
右の御布告を見て面白いのは、時計のことを時辰儀、又西洋時間を現すに、第何字と稱してゐたことと、當時一般に用ひられてゐた四ツとか六ツとか云ふ時刻には一言も觸れてゐないことである。左に新舊時刻對照表を掲げる。

午前	九時	八時	七時	六時	五時	四時	三時	二時	一時	〇時	午後	一時	二時	三時	四時	五時	六時	七時	八時	九時	十時	十一時	十二時	
時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時
九ツ半	八ツ半	七ツ半	六ツ半	五ツ半	四ツ半	三ツ半	二ツ半	一ツ半	九ツ半	八ツ半	七ツ半	六ツ半	五ツ半	四ツ半	三ツ半	二ツ半	一ツ半	九ツ半	八ツ半	七ツ半	六ツ半	五ツ半	四ツ半	三ツ半
眞夜	夜	暁	明	朝	晝	晝	晝	晝	眞晝	眞晝	晝	晝	晝	晝	晝	晝	晝	晝	晝	晝	晝	晝	晝	晝
子ノ刻	丑ノ刻	寅ノ刻	卯ノ刻	辰ノ刻	巳ノ刻	午ノ刻	未ノ刻	申ノ刻	酉ノ刻	戌ノ刻	亥ノ刻	子ノ刻	丑ノ刻	寅ノ刻	卯ノ刻	辰ノ刻	巳ノ刻	午ノ刻	未ノ刻	申ノ刻	酉ノ刻	戌ノ刻	亥ノ刻	子ノ刻

四つではなく、九つ即三十四時のこと、つまり一ツ時のかけねがあることを知ればいわけである。  
鐘の九つ木の四つを打つて來る  
分別ましかへて常の四つに變る  
が、それはそれとして、この西洋時間を知り、日常の用に供する迄は相當の苦心を要したのであらうことは、十八時が午後の六時に當ると云ふことを計算する以上に難かつたに違ひない。又其の時間を知らぬ爲の西洋時計を見ることも當時の人には困難な一つであつたことは、想像外であつたらしい。時計は既に早く輸入され、これが爲に「西洋時辰儀定刻活測」(天保九年版)「西洋時辰儀便覽」(文久三年版)も出てゐたが、明治二年時の先覺者柳河春三の著した「西洋時計便覽」なる小冊子を見る時、その困難さをはつきりと理解することが出来るその一部分を抄出して、明治の初年、私達の父祖達が如何に外國文化の吸收に努めたかをして苦しんだかを偲ぶとす。

夫時計は、一晝夜の間の時刻を測る具にして、萬民必用の器なり、其

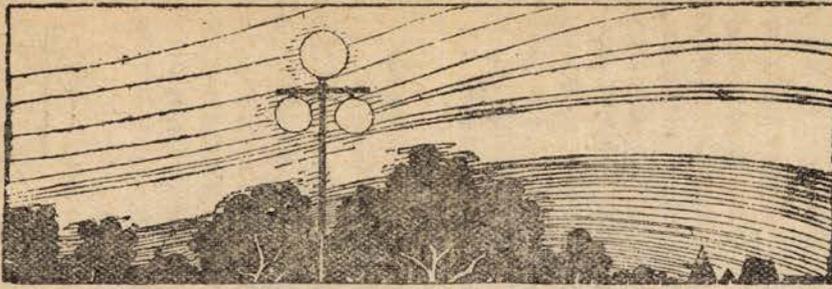
法元來西洋より傳はり、世に行はるゝ事既に久しく、矢倉時計、柱時計、掛時計、尺時計の類、様々あつて、皆人の知る所なれども、是迄の和製の時計は、晝夜の十二時を知らずのみにて、一時の間の細き分劃に至りては、是を委しく知る能はず……」  
次いで舶來時計の時針、分針、秒針を説明し、「今の時計の精密なる事、一晝夜の八萬六千四百分一まで、測るに差はざる事、亦奇妙の至ならずや。」と嗟嘆してゐる。そして懐中時計を、袖時計(二名根附時計)と名づけ、之を圖解してゐるが、羅馬字の説明を加へ、時間の読み方を微に入り細に亙り解説してゐる。これを見る時、私達が廿四時間制を實行するなど、朝飯前と云はねばならぬのは、巷間「えらい難しいことになりましたなあ！」なんて話を耳にするのは、どうかと思ふ。この大改革が御維新の大暴風雨の中に行はれたことは、昭和維新の真唯中に廿四時間制が行はれたことと思ひ合せて感慨にたえぬ。

## 鍊成の 摩耶六甲へ 君と僕

神戸から大阪へ 大阪から神戸へ

待たずに乗れる

阪 神 電 車

電車の  
中で

社會の縮圖と云つてもいい電車の  
中で、何を観、何を考へてゐるか  
云ふことを——(編輯局)

## 鼻の穴の話

石井白面人

私の友人に、電車に乗つて腰を掛けたら、前へ立つた人の鼻の穴を覗くことにきめてゐる男がある。斯う云つても別に耳鼻科のお医者さんでも何でも無い。さうした職業意識で覗くのでなく、鼻の穴を覗くことに此上もない興味を感じて、失禮とは知りつゝも致へてするのだと云ふのである。

その友人に云はせると、鼻の穴と一口に云ふけれど(その實、一口にも二口にも我々の日常の會話の中へ、鼻の穴なる言葉がさう頻りに出て来ないが)なか／＼如何して、そんなに簡単に片附けられるしろものでなく、先づ鼻の穴の形の良否から、大小、さては鼻毛の艶からその伸び具合、鼻糞の硬軟の別、溜り具合、さらにまた鼻の穴の周辺の清掃程度と仔細に分類して観察すれば、一つと無意味なものとはなく恰も旅順に於ける一木一草、一塊の土のその如く、みな何物かを物語つてゐて津々として、妙味盡きないものがあると云ふ。

も最初から他人さまの鼻の穴に興味を感じてゐた譯では毛頭なく、出勤の電車の中で所在なきまゝに、何気なく見上げた鼻の穴に、今にもこぼれ落ちんばかりになつてゐる鼻糞を發見して、思はず吹き出したのが原因で、それが何時の間にかやら前述の分類を得、更に進歩發達の跡著るしく現在では鼻の穴の一瞥から、健康はもとより性格、教養、職業等々が、それこそ嘘のやうに判ると云ふから實際大したもののである。一例を御紹介すると、元來楕圓であるべき鼻の穴が、圓形状をしてゐる人は性格が粗野で几帳面でなく従つて銀行員のやうな仕事には不向きだとか、鼻毛が鼻の穴から我も我もと顔を出してゐるのに一向氣にならぬやうな人は、どちらかと云へば、氣が走つてゐないとか、鼻の穴の小さい目の人は、兎角氣宇潤達を缺くきらひがあり不明朗で、さらにまた呼吸器病にかゝり易いから注意を要するとか云ふのである。

鼻糞をほちくつたり、鼻の穴をいちぢるにしても、何も男は人差指、女は小指と定つてゐる譯でなく、たかたか指や紅差指を使ふ人もさらにあるし、稀には親指と人差指を釘抜型に曲けて、鼻の穴を挟みつける人もあるが、こんな人は大工さんか鍛冶屋さんたらうとか、人差指を二本一週に鼻の穴へ八字形に突込む人がある相だが、こんな人はせつちで一生のうちに何回か釣銭を貰はずに歸つて、後から悔む人だらうと云ふ話である。

鼻の穴覗きの効能はまたまだあつて、時たま乗る電車なら兎に角、出勤退勤の二三十分に義務的に乗る電車なんて退屈なものゝ一つで、大抵は讀みたくなもない新聞や雑誌を時間潰しに擴げてゐるのだけれど、この友人は鼻の穴覗きに精進するやうになつてからは、退屈どころか逆に電車に乗ることが楽しみになつて来たところだ、鼻の穴の占めてゐる位置から考へて、これは如何にも對座してゐたのでは一日経つても覗けるものではない。と云つて如何に妙味津々たるものがあると云つてもまさか他人さまの顎の下へ顔を突きつけられたものでもない。こゝに於いて腰を掛けることと云ふことが、観察者にとつて必然的に要求され、被観察者は足が多少たるくとも立つてゐて貰ふと云ふ結果になつて来る。そして、それが最も自然に行へるところ——と云ふと電車の中と云ふことになるのである。

さう云へば成程座席の具合から考へて汽車では不可能だと云つてバスでは第一動搖が激しく観察に不便である。どうにもこれは電車に限ると云ふことになる。つまり、この場合の電車は、川柳的に云へば動かないと云ふ譯である。斯う書いて来ると、何だか電車に乗つて腰を掛けさへすれば、すぐ他人さまの鼻の穴が極めて自然に、容易に見られるかと云ふと、これまたなか／＼左様ではないらしい。折角腰を掛けても前へ立つて呉れないと駄目だし、前へ立つても(前へお立ち下さると云ふのが本當かも知れないが)書籍や雜誌位なら兎に角、新聞を擴げられると折角の観察が、皆既蝕の觀測陣の前へ現はれた叢雲みたいなもので、お膳立てがすつかりオヂヤンになりその日は丁度牛肉の配給に當り損つたやうな氣持がする相である。それに観察者と被観察者との視線が、如何かした拍子にカチ合つた時もまことにバツの悪い思ひをしなけれ

ばならぬ相であるが、よくしたもので未だ曾つて鼻の穴の観察のために、怒鳴られたり叱られたりした事はたゞの一遍もない相である。

これは被観察者の側から見れば、まさか自分の鼻の穴の前に掛けてゐる男が窺つてゐるとは思はないし、鼻毛の具合から想像は過去、現在、未來へ亘つて飛躍に飛躍を重ね電車動揺を快るよいリズムと聞いて、想念は雲と湧き風と擴がり、陶然と三昧境に遊んでゐるとは夢にも氣がつかないからであらう。假りに可笑しな男だな、變に見上げるやうだなと思つても時間も短かいことだし、そのうちにどこからか下車して仕舞ふと云ふのであつて見れば、氣にも止めないことに違ひない。

妙齡の女性が、あられもなく覗けば見える鼻の穴の程に鼻糞を溜めてゐるのは、芝居を樂屋から、大道具の後ろ越しに見るやうな氣がするし堂々たる體軀の紳士が、いはいに茶色の鼻毛を覗かせてゐるのも、些か威嚴を保つ上に畫龍點睛を缺く憾みなしとしない云ふ。

あまりこの鼻の穴のはなし、もながくなるやうであるから

この邊でピリオドをうつことにするが、この友人の子供が嫁を貰つたりするときには、勿論この親父さんは何を措いても鼻の穴を覗くに違ひないと思ふと苦笑を禁じ得ない。

そしてまた、この友人から時折鼻の穴の講釋は聞かされては來たが、私はまだ當のご本人の鼻の穴を見てゐないのである。いづれそのうちに、私が腰を掛けて、この愛すべき奇癖の所有者である友人を立たせて、とくと觀察をしたあかつきには、再びこの誌上を拜借して皆さんに是非ご報告することを約束して一先づ筆を擱くこととする。

(二七、一〇、七稿)

老婆・たばこ

ラツシユ人

河野夜王

車内道徳を八ケましく言ひだしたら、御老人方、特にお婆さん達が厚顔しくなつたと云ふ事はどこでも良く聞く話です。僕も二度や三度は目撃しましたが、これは最近のほや／＼の話です。

信濃橋からならば行の電車の中、或る停留所で僕の前のお客さんが立ちましたので當然僕が替つて掛けても良い筈

ですが、隣の吊り皮の御婦人に敬意を表して掛けて貰つた處へ、どや／＼乗り込んで來たお婆さん二人、其の中の一

人が折柄動き出した動揺でひよろ／＼と僕の近所迄來たと思つたら「エライスンマヘンケド」：と、とう／＼今かけたばかりの婦人を追たて、いとも御氣嫌なゝめに腰を下した——迄は良かったが連れの一人へアンタも一寸替つて貰ひなヘレヤとすゝめ出したのには、いさゝかあきれて僕は思はずくすりと笑つてしまひました。

或る日××に參拜すべく或る郊外電車に乗りました。××あたりまで行くと、もう青い山も松の木も見飽いて、一寸意屈して煙草のケースに思はず手がさばりましたが、車内禁煙のポスターを見ては流石に不行儀なことも出來兼ねつと立つて運轉臺の近所迄で行つて、電車の前に展ける、景色を見るときもなく見てゐました所、車掌さんがつか／＼やつて來ました。そして彼氏も車内無事故に意屈したかボケツトからケースを出して一本くはへ、さもうまそうにふかり／＼と一服やり出しまし

た。僕はいさゝか驚いて車掌さんのお顔と禁煙のポスターとをしばらく見くらべて見ましたが、實は内心やれ／＼と救くはれた氣もしまして此處で喫つても良いですかとおそる／＼御伺ひを立てました處

彼氏曰く「大阪の近所ではうるさいですが此處まで來たら構はんですよ」といとも眞面目に、天下泰平のお顔をしてゐました。

僕が句會に出席す可く宅を出るのは、大てい六時前後です。××終點は××の××時で大混雜、ラツシユアワーなんて生まやさしい言葉で表現出來ないモノスゲーものです歩いた方がましかなーと思ひもするが時間の都合もあるので、やつぱり乗せてもらふ事にしてゐます。××さん達の無理押しには流石な僕も參いつてしまひます。車掌さんが「満員ですお次へ願ひます」と止めた位で聞かばこそこの電車に乗りおくれたら親の死に目にも、逢へないぞと言ふ程の見幕で、遮二無二押込んでしまひます。さて次の停留所と同じ様に乗り込もうとする人達へ「満員だ」と車掌さんに扉を開かせまい

としたり、大きな聲でどなつて一人でもう乗せまいとする人達は、自分が無理に人を押込んで來た彼氏達だから黙つて見てゐるととても面白いです。

車掌學

谷口綠葉

大分前の話です。一寸大阪に出てくる電車の中でもすぐ酔ふたわたくしが、一日中乗つてゐなければならぬ電鐵會社に就職することになつた結局こんな心配も馴れるにつれて吹飛んでしまつた。電鐵會社は何處でもらしいのですが半年や一年間位は必ず車掌や運轉手の見習といふのがあつて、わたくしにも制服に、見習の帽章のついた制帽をかぶつて教習所通ひが始つた。昨日は「切符の切り方」、今日は「驛名告知の練習」、つまり「次は××でございます」××行のお方はお乗換へを願ひます」といふあれですね、明日は「サーピス學科」と言ふ風に凡そ車掌學は微に入り細に亘つて講義をして貰ふのですが子供の頃に憧れた車掌さんも仲々樂ではありませんどうやら教習も終へ、一定の期間お師匠さん：未生流では

ございませぬに随いて貰つて車掌として乗務すると、こゝんでは愈々一人前：心細い一人前の車掌さんになるのです。が、馴れる迄が大變なんです所謂「驛名告知」といふのをやるのですが、生れてはじめてその第一聲たるや、二汗や三汗ではございませぬ、然も生れついでにのしほから聲を精一杯に張り上げて、よく車内に行き渡る、いともすき透つた聲にしなければならぬのです、車内のお客さんが皆一齊に此方に向けたなと思つたあととも實際無我無中で何も見えなかつたです。又お客さんが一度に多勢乗つて來られるともう慌てゝしまつて切符を切るのにどこを切つて良いやら切符をぐる／＼廻すばかりで迷宮に入つてもまつたり、それから自動扉に一寸さわつた位なことを車掌席までわざ／＼お出てなすつて、當てよつたな!! 憶えて居ればよ!! と云はぬばかりの物凄いい目で睨まれたり、亂暴なのになるも競馬歸りのお客さんです、ね、負けたらしいのです、八つ當りに當りちらしたり、又花見時なんか：いまごろはあまりお見掛け致しません：酔拂ひに管を巻かれた

### 卵で乗る

櫻川 不水

新米へニヤ／＼笑ふ顔が  
寄り 綠葉

り、色々辛いこともありますなにか新米時代でしたので時にはうつかりカーブにひつかゝつて失禮ではございませぬが、不可抗力とか言ふやつてきれいなお客さまのお膝に凭れかゝつて笑はれたり、最終車に乗込んで睡目をこすつてゐると妖艶なお方に握手を求められてハツト目が冴えたり、いやはや悲喜交々至るです。通勤の電車の中で其當時のことを時々思出しては苦笑するのです。

一人の婆さんが風呂敷包を片手に、郊外電車へ乗り込んだ。車掌が鉄を入れに來ると婆さんは薄汚ない財布の底を叩いて拂つたが、四・五錢足りなかつた。然し婆さんはさして困つた様子もなく、徐ろに件の風呂敷包から卵を一個とり出して「足らんとこはこれだ、我慢しなはれ」と……物々交換は當節流行とは云へ、これは又傑作である。途中で降りたから結末は知らなかつたが實際にあつた話。

### さばかれた客

武部 香林坊

すゞなり電車に足も棒になつた頃、堺筋で一人の男が降りた。車掌君に切符の間違つたことを指適されて、苦しき居直り文句「さつきに交又點で降りる筈だつたのに

## 同舟近詠

松山前田 五健

おろさんからだ「車掌君も何か云つてゐたが果てしがつかぬ。すると乗客の一人が「この満員の電車を何時迄止めさせろのだ。皆んなおりてゐるのに何故お前だけが下りないのだ。車掌も忙がしいのだから協力してやるのが本當だ。車

舟の無い子にはさびしいひとへも  
鉛筆を削つて減らす男の子  
火叩の影の靜かに今日の月  
稽古事今日あの人の柄嫉む  
ラッシュアワリーの譲り合ふ氣は乗らばこれ  
收支償はぬ算盤枕もと

舟田 翠峯

忍耐は自分ばかりと思ふまい  
耳に目に説教多く疲れたり  
改札を奇術一座の變シもなく  
或日フト拜みたくなる鉄の艶  
白菊のあかるさ机拭き直し  
黙まつて見る友達の禿けた事

安川 久留美

金鷄一ぶく 晩稻刈る秋  
秋の蠅パーマメントへ氣紛れな  
名月を猫の横ぎる大通り

仁川池田 可宵

捕はれて愛國心は焼く如し  
風呂の沸く煙歸省の眼にしみる  
骸骨を見てる心に慾はなし  
惚れてると見せる女給の稼ぎ高  
一日の長があります兄の口

兵庫藤影町 長崎 柳 秀

骨壺の金齒はそつとして置かう  
それほどでない悪友を母案じ  
人生は蚊取線香の灰のやう

山口縣 三原 狂路

旗の文字無筆だまつて墨をすり  
熱のない日はコスモスに句をも  
マンホール何か秘密のありさうな  
曼珠沙華毒婦のやうに生れつき  
故郷いま夜霧に濡れて戀しい灯  
白痴美の何をか娘頬笑みて  
コムバクト柳に風と受け流し  
琴の爪男ゴリラのやうにはめ

福井縣小濱町 村田 眉丈



# 初等川柳講座 (一)

麻生路郎

## 寫生句とはどんなものか

古句に、  
押へれば芒放せはきりぎりす

と云ふのがあります。この句のやうに、観たまを、そのまま句に纏めたのが所謂寫生句なのであります。しかし観たま、そのままを寫生すると申しましても作者は川柳といふ眼鏡を通して観てゐるのであります。言葉を変えて申しますと川柳的な鋭い觀察がなければならぬのであります。従つてこれを表現する用語にいたしても又川柳としての味や色や匂ひを出すのに尤も適切なものが撰まれてはじめて完全な寫生句が生まれるのであります。

右に例示いたしました「押

のがあります。前句は芒の中にたきりぎりすの姿に眼を向けたのであります。後句は芒の中の虫の聲に角度を變へた譯であります。

要するに寫生句は心理的に深く掘り下げた的確な觀察が必要なのであります。單に観たままを忠實に寫生しただけでは所謂さうですか川柳になつたり、報告川柳に終つたりいたしました、何等魅力のない句になつてしまふものであります。又その表現が餘りに誇張に過ぎると、嘘偽感の方が盛り上つて多くはピンと来ない句となります。何れにいたしましても、穿ち味があるか、ユーモア味があるか、或は川柳的な情趣が伴はない限りは所謂寫生句としての價値がないこととなります。

次に、  
ぶちまけて二タ足逃げる  
炭俵

と云ふ句に就いて説明をいたします。これは穿ち味のある寫生句であります。逃げるのに、二タ足と限定いたして居りますが、この二タ足はこの場合の情景を表現するのに尤も適切なのであります。炭俵をぶちまけた時に、パツと突

けむりと云ふと一寸可笑しい

言葉ですが、こな炭がけむりのやうに立つ、そのありさまをホントによくあらはしてゐると思ひます。そして、その瞬間「ヂ〜」と二タ足逃けた人物さへ想像することが出来ます。句を評する時に、動く動かぬと云ふことを申しますが、この句の場合、この二タ足の用語は全く動かない的確なものであります。

もう一句例示することにしたします。  
折れたかと思へは起きる  
筏さし

これは筏師即ち筏に乗ることを業とする人の棹さす動作を寫生した句であります。折れたかと思へばは随分極端な誇張であります。その誇張に寧ろ興趣を感じさせられこの奇抜な觀察がこの句の生命だと云へるでせう。又同時に筏の下つて来る谷川の景色が、目にうかんで、鏡景川柳としての優秀さを表はして居ります。

要するに寫生句は人生と自然の眞と美を川柳的に表現したものであります。従つて川柳味の扮飾が稀薄になればなるほど、魅力のない單純な眞又は美を表現したのに過ぎない句となつてしまふものであ

## 寫生句は斯うして作る

寫生句は吟行でもしなければ作れないといふ譯のものでなく、家庭にゐても、何處でも作れるのはあります。また川柳をはじめて間のない一人の柳人に、鉛筆と句帖を懐にさせ、戶外へ寫生に出かけさせることにいたしましたこの川柳人が、どんな場面にぶつつかつて、どんな寫生吟を詠むかを共に味つていたたくことにいたしました。ここではこの川柳人を彼と呼ぶことにいたします。

彼は犬の犬嫌ひでありました。彼の出で行く道には犬を飼つてゐる家があるのであります。その犬はこわがりです。至つてカンの悪い犬で、何んの危害も與へない彼が通つてさへさかんに吠えつのであります。今日も彼はビク〜しながら、その家の前を通りましたが、いつもの通り、その犬は吠えるのでした。そこで彼は「大きらひ犬とこわ〜すれ違ひ」といふ句を詠みました。しかしこれでは、カンの悪い犬の態度が少しも出てゐないで、大きらひな彼

がこわく、犬とすれ違つたと云ふ事實をこれだけの文字を使つて報告してゐるのに過ぎない句であると思ひました。そこで更に「臆病な犬こわそうに吠えてゐる」と詠んで見ましたが、今度は犬の態度が出た代りに、こわがりの人の行動が少しも表はれてゐないことになりました。しかも臆病な犬と上七でことわつて置きながら、臆病な態度の説明に過ぎない「こわそうに」といふ言葉を用ひたので、外のことが云へなくなつてしまひました。

そこでフト、

こわがりな犬こわがりな  
人に會ひ

(某人)

といふ句を思ひ出し、なるほどこの句なら逃げ腰で吠えてる犬と、吠えられてる人がオジ／＼とすれ違つてゐるところが巧く寫され軽い滑稽味さへ出てゐると思ひました。

「犬ざらひ犬とこわく、すれ違ひ」では、こわがりな犬がこわがりでない犬か、吠えてゐるのか、吠えてゐないのか、犬の方のことは少しも判らないことになりました。同じ何材にぶつかりながら、表現の上手下手で、斯うも違ふものと云ふことを教へられたのであります。

犬と分れて、向ふへ行くとい人のルンベンが流行歌を唄ひながらやつて來ました。そこで早速、「塵あさりゆくルンベンの流行歌」と彼は句帖へ書きとめました。そして、この句を讀むと、ルンベンが朗らかな氣持になつて、流行歌を唄ひながら、行くさまが出てゐるとは思ひましたが、もう一つ巧い句だとも感じられぬので、「拾ひ屋も唄ふ四月の空は晴れ」と更に一句をものして見ました。これで季節とか、天候とかは出たと思ひますが、「拾ひ屋も唄ふ」とだけではルンベンの動きが稀薄になつて狙ひが外づれたやうに思ひました。「拾ひ屋も」の「も」がウンと句を弱くしたのかも知れませんが、それに「唄ふ」と云つただけでは特に朗らかな氣が出てゐないと思ひます。そして「空が晴れ」ばかりが際立つてピンと響く句になつてしまひました

何も彼も云つてしまふと全く味のない句になると聞かされてゐましたが、この句がそれではないかと思ひました。

ところが、

拾ひ屋も上海だより唄ひ  
つ、

といふ句のあつたことを彼は

思ひ出したのであります。そして彼自身の句と、どんな點が違つてゐるか、どんな點が似てゐるかといふことを比べて見ることにいたしました。

先づ、最初にスケツチした「塵あさりゆくルンベンの流行歌」と比べて見ました。「塵あさりゆくルンベン」といふ長い字數を、「拾ひ屋も」とあつさり片づけてゐるし、「流行歌」を「上海だより」と具體化して、時代を出してゐるし、「唄ひつゝ」の下五の中に「塵あさりゆく」を利かしてゐることに氣づいて何んと巧い表現技巧をするものだと感心したのであります。一気に讀み下して見ますと、ルンベンが街路の塵箱を漁りゆく、のどかな風景が眼に浮んで來ます。そして、句の緩やかな調子からは、なんだか春の日は、ぼか／＼あたつてゐて、蒼空さへも感じられるやうに思ひました。

この句で學ばなければならぬのは「拾ひ屋」の「も」が「さへも」の省略の「も」であることと云ふことであります。この「も」のため一層のどかさかじみ出たのではないでせうか。ルンベンといふ文字を使はず、拾ひ屋とい

ふやはらかな文字を使つた點にも感心させられたのです。そして、後句のやうに、「四月」とか、「空は晴れ」とか云ふやうな文字で、季節や天候を表はさなくても、季節や天候を適切に、それ等感受出来る句が作れるものだといふことを知つたのであります。

彼はその足で海岸の方へ歩み運びました。そして波打ち際で一匹の蟹を見つけたのであります。今の先までこともたちに悪戯をされてゐたらしいのであります。早速鉛筆をなめて句作にとりかかりましたが、いいも悪いも、てんで句にならないので弱りました。蟹のやうなものを川柳に詠むといふことは、非常にむづかしいものだとつくづく感じたのであります。とう／＼一句出來たので句帖へそれを、次のやうに書きつけました。

「安心をした蟹鉢仕舞うなり」句意を説明するまでもないことと思ひますが、詰まりいんまの先迤いたすらしをいたので、もう海岸は蟹の世界となつたことを蟹が知つた

心し切つた蟹は敵をふせぐための鉄を片づけることにしたと云ふのであります。今度は自分ながら思つたよりも巧くスケツチすることが出來たやうに考へられたのであります。

彼はいそいで家へ戻りました。そして書棚から一冊の本を抜きとつて、ページをバラ／＼と繰つてゐましたが、次のやうな句を發見したのであります。

眼を曇み鉄を伏せてもと  
の蟹

(町二)

彼はこの句と、自分の作つた句とを比べて見ました。この句は「眼を曇み鉄を伏せて」と云つて安心をしたといふ意味を表はしてゐます。彼自身の「安心をした」と云ふ説明的な文字を使つてゐないのに先づ驚かされたのであります。これこそホントの寫生だと思ふのであります。そして「眼を曇み」といふやうな印象的な表現が、いつになつたら出來るかと思ふと、一寸心細くなりました。「もとの蟹」といふ言葉で、いんまの先まで、からだをよりあげ、泡をふき、鉄を差しあけて、まさに抗戦の状態にあつたことまでが感受されるのであり

た。そして書棚から一冊の本を抜きとつて、ページをバラ／＼と繰つてゐましたが、次のやうな句を發見したのであります。

彼はこの句と、自分の作つた句とを比べて見ました。この句は「眼を曇み鉄を伏せて」と云つて安心をしたといふ意味を表はしてゐます。彼自身の「安心をした」と云ふ説明的な文字を使つてゐないのに先づ驚かされたのであります。これこそホントの寫生だと思ふのであります。そして「眼を曇み」といふやうな印象的な表現が、いつになつたら出來るかと思ふと、一寸心細くなりました。「もとの蟹」といふ言葉で、いんまの先まで、からだをよりあげ、泡をふき、鉄を差しあけて、まさに抗戦の状態にあつたことまでが感受されるのであり

た。そして書棚から一冊の本を抜きとつて、ページをバラ／＼と繰つてゐましたが、次のやうな句を發見したのであります。

彼はこの句と、自分の作つた句とを比べて見ました。この句は「眼を曇み鉄を伏せて」と云つて安心をしたといふ意味を表はしてゐます。彼自身の「安心をした」と云ふ説明的な文字を使つてゐないのに先づ驚かされたのであります。これこそホントの寫生だと思ふのであります。そして「眼を曇み」といふやうな印象的な表現が、いつになつたら出來るかと思ふと、一寸心細くなりました。「もとの蟹」といふ言葉で、いんまの先まで、からだをよりあげ、泡をふき、鉄を差しあけて、まさに抗戦の状態にあつたことまでが感受されるのであり

ました。

ここで、彼の寫生句の試作を打ち切ることにいたします。そして彼の寫生句が、何故見劣りがするかと云ふことの理由を附け加えて参考に資したいと思ひます。

すべて句といふものは説明ではなく、描寫であると云ふことであります。彼の寫生句は又しても被寫體の説明をしようとするのであります。

作者自身が、その作品の中へ首を擡げることが禁物なのであるといふことを知らねばならないのであります。

## 多作と寡作

川柳の指導用語に、多讀多作と云ふ言葉がありますが、多讀に就ては前に述べましたので、ここでは多作といふことと、多作の反對の寡作といふことに就て述べることにいたします。

多作とはどんなことかと申しますと、文字通り多く作ると云ふことであります。従來の作家は先輩から多く作れ、多く作れと云はれたので、何んの反省もなく、ただ多く作りさへすればいいのだと考へて、無闇矢鱈に作つたのであ

ります。しかし、それ等の無闇矢鱈に多作した人達の中から、いい作家の一人や二人は出たかも知れませぬが、耕作に對する何等の智識を持たない者が休閒地へ無闇矢鱈に種を播いたのと等しく、いい收穫のあらう筈がないのであります。

そこで、何故多く作らなければならぬのか、多く作ることによつて、どんな利益があるのか、どんな弊害が伴ふものであるのか、多く作ることがいいと判つたとすればどうすれば多く作れるのか、いけないとすればどうしていけないのかと云ふやうなことに就て一應知つておく必要があらうと思ふのであります。又

多く作ることの反對、即ち寡作に就ても、何故多く作らないのか、その原因を考察して見るといふこともあながら爾ではないと信するのであります。

先づ多作の種類とその方法と、その結果に就いて一々検討することにいたします。多作の種類といはしましては主として課題吟の多作と雑吟の多作に分つことが出来るのであります。課題吟の多

作と云ふことは明治末葉の川柳勃興期から大正の初期にかけてはなかく盛んで一題百吟、二百吟を作ると云ふことも決して稀ではなかつたのであります。少しく熱心な作家であれば一題百吟を徹夜して作つたことさへあるのであります。が、斯うした多作は句

を構成する上に、想を練るとか、いかに字酌を驅使するかと云ふことに就ては多少とも役立つたものではあります。が、多く作ると云ふことに一つの誇を持ち、濫作の弊に陥つて作品の向上を甚しく阻害したのであります。肝腎の雑吟さへ徒らに古句擬ひの句を多作

するだけで、雑吟を通して、思想の閃めきを見せる作家は寧ろ異端視せられるといふ状態であつたのであります。作句の方法にいたしましたも、多作家の中には、句箋を手にするなり、先づその課題を書き、笠附でもするやうな調子で、ドシ／＼そのあとへおきまり文齣をくつつけてゆ

くと云ふいかげしい作句振りの作家も見受けたのであります。それ等の作品が、文學的價值の高からう筈がないのはあまりに當然だと云はねば

ならないのであります。その後、一部の達人によつて、詩としての川柳が叫ばれるやうになつて川柳が思想的な飛躍をいたしましたのであります。尤も今日でも標語に類する川柳に終始してゐる一派のあることは云ふまでもありません。

要するに機械化された多作は多くの類型的な作品を世に送り出したに過ぎないのであります。が、どうして適當な辭酌を驅使するかと云ふ點では多作とその推敵に據る外はないのであります。多作といふことの効も全然見通す譯にはいかなないのであります。

多作して句を練ることは音楽家の音階の練習に等しいものであります。よしや多作するとも安易な句作に墮せぬやうに心すべきであります。課題吟の多作によつてある程度

の作句練習に効を積んだ作家の行くべき道は雑吟にあることを忘れてはならないのであります。雑吟はその環境により、心境により、必ずしも多作し得ないのであります。から常に課題による作句によつて練習を怠らぬこととあります。その方法としては人によつて一題百吟、十題百吟位

を作るのが適當ではないかと思ふのであります。一題で二句や三句作つてゐるやうでは詩想の伸びる餘地がなくおそらく上達することは困難でありませう。

次に寡作について少しく述べて見ませう。不熱心な作家が寡作であることは云ふまでもありませんが、随分熱心な作家であつても性格的に寡作である例は稀ではありません。これは作品の推敵に慎重である結果、自選して投句が甚しく減少するのであります。殊に句中、腦裡に於て自選するために一層寡作となるのであります。しかし過去の多作家と寡作家との作品を比較して見る時、寡作家の作品の方が、むしろ光つてゐることを發見するのであります。から寡作決して憂ふる必要はないと思ふのであります。花火線香式多作家よりも、持久性のある寡作家の方がのぞましいと云へるのであります。

## 正誤

前號(初等川柳講座)八ページ五段二十五行目の句を「あはや子は庭へおちんとして笑ひ」と訂正する。







子澤 山床屋はだしの腕を持ち  
 氣の早いことに 白旗用意され  
 燕にも 日本育ちといふ誇り  
 いゝ子だとほめてネクタイ引張を  
 よく泣いた彼奴が勳章下けて来る  
 丸刈へ七三の跡残つて来る  
 改札もパンチ 持つ手で 萬歳し  
 窓口の百圓札を妬み見て

臺灣へ嫁ぐ女子へ

臺灣へ冬物などをくれて發ち  
 仁丹へ出す手も 軍需工と知り  
 ふところが減つて旅人らしくなり  
 子を兵にして 親といふ顔になり  
 張り替へる前だ障子を破れ破れ  
 休憩時間オールドミスは毛糸編む  
 獨り者洗濯の泡もてあそび  
 ビルの上まだ朝の月残つてゐる  
 この家も 夜霧にうるむ 受験の灯  
 お前軽るそなた擔架に乗れへんか  
 軍神の生家の夜を虫がなく  
 生涯をつたなき浪花節がたり

- |          |           |          |           |          |           |         |   |          |   |          |          |          |   |
|----------|-----------|----------|-----------|----------|-----------|---------|---|----------|---|----------|----------|----------|---|
| 横濱 本多 正治 | 名古屋 八幡 勿來 | 神戸 市川 治男 | 名古屋 前田 秋登 | 大阪 恩賀 紀川 | 岐阜縣 奥村正太郎 | 尼崎 田淵 治 | 同 | 瀧洲 西垣 銅風 | 同 | 尼崎 窪山 雞子 | 東京 岡部 士節 | 大阪 谷崎 一昌 | 同 |
|----------|-----------|----------|-----------|----------|-----------|---------|---|----------|---|----------|----------|----------|---|

明暮をうつむきつゞけた母の背よ  
 山葡萄 僕にも 故郷ありはあり  
 歸還してあの娘この娘もお嫁さん  
 活花も モンベで 習ふ新時代  
 通帳の名の子大きな返事をし  
 日曜へ 煙突もまたのどかなり  
 顔觸れが逢ひ 常會 呆氣なし  
 別荘の留守を守つて 蟬は 果て  
 ステツキの握に似たる 胡瓜成る  
 班長も 地方で會へば 京言葉  
 偉人傳ばかり 希望に 滿つ 書棚  
 此頃は 達者になつた茄子の味  
 海の 幸さけて 友達たづねて來  
 説教の 文句に 父もちと 困り  
 まどろんだ 夢を車掌に 起されて  
 名取りして 娘は嫁ぐとは 言はず  
 美やまし 燕南へ かへり 行く  
 月明り 男同志の 膝と 膝  
 日赤志願大和おみな死ぬところ  
 戦時下に 娘らしさを 忘れかけ  
 歳寄りのあまへられてるを 氣付き  
 琴しばし 音をひそめて 虫とゐる  
 歸還してまたそのくせがぬけ切ら  
 退社とまつすぐに行くピヤホール  
 笑顔如きに迷ふまい 男なり  
 溝しばし二人に 待てと 暗示する  
 ごて出した 慾目ばかりの 遺産わけ  
 魚釣の 自慢話を 猫が 聞き  
 休閑地 百姓程の 種を買ひ  
 謹嚴そのものゝ 如く 電話かけ

瀧洲 上倉 澤柳  
 同  
 大阪 谷崎 一鐵  
 同  
 瀧洲 篠崎しげを  
 同  
 大阪 八田 龍生  
 同  
 大阪 米田 春童  
 同  
 大阪 新川 博也  
 同  
 大阪 梅田 秀溪  
 同  
 西宮 花柳萬龜子  
 同  
 朝鮮 上田丸太樺  
 同  
 大阪 石川ひさみ  
 同  
 兵庫縣 森本 花子  
 同  
 大阪 丸本 花美  
 同  
 大阪 松村 茂路  
 同  
 大阪 森川 平行  
 同  
 大阪 中村 仙人  
 同

片足が門にかゝれば苔の道

支那に到れば仕職の夫人が腰を低くして冷水をサービスして呉れる。その昔朝日の清水と稱して靈泉であらう。「今日は案内人が居りまへんどすよつてに御自由にお通りやして見ておくれやす」といふと、やがて京都都内に入れば、約登萬坪の庭一面に珍らしい苔が擴ろがつて思はず感歎の聲を放つ。

禪寺の苔に唸つてゐる

計り 佐保姫の心に叶ふ苔の道 乙平  
 苔踏まぬやうに歩く 香林坊  
 趣味のうち  
 右に茶室があり左に林泉がある。幽かな自然の妙趣を味ひながら苔を踏まぬやうゆるやかに進む。苔寺の境内を總稱して指東園と云ふ。本庭園は鎌倉時代から起つた禪宗寺院の庭園として最も代表的なものでこれを禪院式庭園と云つてゐる。庭を二分して黄金池一名心字池の平地一面と洪崖山と稱して高臺一面とより成つてゐる。上部に枯山水の石組を行ひ、下部に心字形の池を作つてゐるので、この地割法を禪院庭園の二段構へと云ふことが出来る。神妙に三人が辿り着いたのが、湘南亭である。利久の第二子少庵好みのもので桃山時代の茶室建築として傑出してゐる。昔岩倉贈水國の滯んだところとして有名である。本那住昔の建造物中にも稀れに見る所の土管井を用ゆる稀有のものとして其名高く今は國寶となつてゐるか誰でも上れるのが誠に嬉しい。

湘南亭貴人の息のか、

湘南亭 香林坊  
 池の鯉が跳ねて静寂を破るが直ぐ元の静けさに返る。この邊りよくに道狭まぐ苔に用心して作句などから庭の美を味ふ。池畔の小茶亭である。湘北亭にしばらく足をどめて清雅



釣れぬ日はたゞ暑かつたを云ひ  
 やめる店遅刻平氣な顔となり  
 御親切様と女はとり合はず  
 改札は子供の名前すぐ覚え  
 もう一度打水をして客を待つ  
 祖母健在で純綿のオムツ干す  
 親と子と孫迄揃ふ休閑地  
 夕立に追はれる様に電車来る  
 探させたビブ子供がいちつて  
 逃げ出・氣マツカーアサー椅子に  
 こぼろぎの聲名曲に似て細し  
 説教所きちんと下駄は揃へとき  
 命 中を撮しにまたも急降下  
 紋付を着ても躰長みつけれ  
 戦地へもそのまゝ行けよ今日の月  
 軍神となつて世に出る日記書き  
 先生と云はれ日記も議論めき  
 腕時計たつた一つの新家庭  
 土地の妓は故人の二號のこも云ひ  
 同僚であつた二號に同情し  
 早婚の話事務所の隅へより  
 火叩は不動のまゝでぬれてゐる  
 ヤスリ持つ女工パーマでやつても  
 歸還した兄の縁談もう決まり  
 月に居て親の安否を問ふ歩哨  
 迷ひ子がやはり減らない百貨店  
 あらわしが行き十五夜で雁のやう  
 エリアノも聞きたい話苦にならず  
 萬歳の聲が身に沁む年となり  
 トランプが将棋に變る俘虜となり  
 自轉車が妹をひいてにけてつた

大阪 森川理恵子  
 同 兵庫縣 河野 甲東  
 同 朝鮮 高原源太  
 同 大阪 田川 迷  
 同 朝鮮 村野東狂子  
 同 大阪 尾原 喜樂  
 同 松江 本庄 稔民  
 同 大阪 松村 實徳  
 同 高根照石見田中 弘權  
 同 大阪 佐野 牛歩  
 同 松江 恒松 町紅  
 同 奈良縣櫻井 吉田 漢高  
 大阪 細尾 一作  
 大阪 大陸 五郎  
 大阪 北 利美  
 大阪 浪花 風柳  
 大阪 伊田無哲坊  
 大阪 大地 春生  
 大阪 長山 眞星  
 大阪 林さくら (十二歳)

國債た豆債券た主任さん  
 ビヤホール夕刊買うて列につき  
 釣竿にとんほとまつてまたつれず  
 改札をいそいで通る子澤山  
 改札はパンチで足の蚊をはらひ  
 ふられた僕に子が先きに出来  
 ランプにも馳れてベルマの奥深く  
 名月へ座り度くなる三笠山  
 拜啓の次に御無沙汰いつもつき  
 ボルネオにて  
 南洋で血のつながりを知らされし  
 母子草の話がはづむピクニツク  
 母の文字死山血河も飛び越さず  
 満員車もう一人だけ乗せてゆこ  
 戀などはあつさり捨てて嫁ぎ行き  
 星寒しなどといつてる下宿街  
 失戀も一べん位かまはない  
 新任の先生若さ親しまれ  
 建賣のもうこんなにも出来上り  
 賣つてやるやうに云ふたへおさま  
 常會で何時もおやちしやべつて  
 とやかくと言はず隣保は汗で行く  
 この将棋負けたと言へと口でせめ  
 休憩の手と手バリガン代りあひ  
 征く友へカメラ 櫻の花を入れ  
 新印は二三度擦しても気がすまず  
 十五時がお茶の時間とタイピスト  
 派手すぎる妹の柄に嫉妬めく  
 忙しい時は灰皿邪魔になり  
 人生の縮圖に夕刊賣りの聲

大阪 廣瀬 松子  
 大阪 六角 桂風  
 大阪 御厨 平風  
 池田 立川 良  
 大阪府 東方 鷹丸  
 金澤 入口 隼子  
 雨派 池田 吾平  
 大阪 武部若菜女  
 大阪 小林 定七  
 廣島縣 武 俠骨  
 大阪 西岡 佳春  
 京都 佐藤 宿川  
 名古屋 美馬 覺史  
 大牟田 上田柳戀子  
 名古屋 鈴木 孤舟  
 兵庫縣 中島 笑子  
 名古屋 山口ひろし  
 大阪 齋藤 三丸  
 津山 粟井 蛙郎  
 津山 丸尾 青嵐  
 大阪 畑 清柳坊  
 津山 福井燦太郎  
 大牟田 園田 初舟  
 大阪 佐藤伊三郎  
 朝倉 金浦 茂  
 東京 板野 廣吉  
 名古屋 松井 静子  
 小倉 岩井 泉  
 大阪 島田 一人

な林泉美を心ゆく迄満喫した。  
 青々と何處迄つづく苔  
 乙平  
 苔の道心和らぐまゝ歩  
 池畔から別れて向上願を掛け萬年  
 苔を眺め洪隠山の高臺に差しかゝる  
 と藁間といふに敵軍の襲來を受く。  
 乙平  
 木蚊にざれ  
 通書路を登りつめると、青苔滑か  
 である。眞如親王の草庵は此の位置  
 で指東庵と云ひ今これを開山堂とも  
 云ふ。其傍らに夢窓國師坐禪石があ  
 る。庭園は小徑をのぞくほか土の色  
 も見せず、上部庭園の小高い山から  
 下部庭園の池の水際まで餘まずとこ  
 ろなく苔の庭である。  
 乙平  
 ひろうどの苔にこつそ  
 指東庵の横手の庭は枯山水風を主  
 として石ばかり組んで作つたもので  
 ある。  
 乙平  
 枯山水水が流れて来さ  
 うなり  
 香林坊  
 漸く寺に暇を告げて電車で四條河  
 畔に出る。神田川と云ふ家に辿りつ  
 く。廊下を通り抜けて四條磧に達ら  
 れた床に出た。  
 水音を涼しく聞いたよ  
 しず張り  
 香林坊  
 三人に二本のビールが運ばれてい  
 くつかの皿が出たが……  
 待つてゐた鱧はいつち  
 終ひなり  
 香林坊  
 誰も居ない苔の磧の方から尺八の  
 音が聞こえる。ふと見れば虚無僧が  
 河原つたいにやつて來たのである。  
 虚無僧が裏から來るも  
 如才なし  
 香林坊  
 磧に黄僧が迫る。そこへ大皿に乗  
 つた鱧が出た。  
 兵隊を思へば鱧勿體な  
 香林坊  
 鱧は舌の上で溶けそつた、ひつ込  
 むである眼玉がだん／＼表通りに出  
 きた。元氣をつけて大いに銚後を働  
 かう。



# 草木徒然

西田 艸 樂

## 柏と栢

本誌九月號の武玉川研究

二代めに終白楨の語に成

の句あり。例により塵山、東魚、省二の三長老の論講はいつもながら明快にして、啓發せらるゝこと尠からず、感謝してゐる。前掲の句の意味は塵山老の解説に相違ないが私共淺學にも信ぜられる。「白楨」なるものについて御三人をそれ／＼の説が出て面白いが、實は此の諸説、白楨は栢楨と書いて、びやくしんと音讀すべきで……(塵山) 伊吹栢楨とも稱し……(省山) 東魚氏は和漢三才圖を引いて栢(びやくしん)圓栢俗云栢杉云々などとある。

は此の處十年近く迷つたものである。といふのは、栢は今日では大多數がカシハと讀むで敢て意とせぬどころか、それはかのカシハモチを包む葉だと解してゐる向が一般ではなからうか。ところが安ぞ知らん栢はあの様な潤葉樹でないのである。それは極めて細い松杉の葉の如き針葉樹の一種を指すのである。だからカシワモチが包めそうな道理はない。

先づ領得して置くが、栢と讀むべからずがその何故なるかを判知し難い、前記塵山老の御説「栢楨と書いてびやくんと音讀すべき」ともあるが、これを栢楨と書いても、びやくしんと音讀して一向さしつかへないのである。康熙字典には栢も栢も出てゐるが、ハクとビヤクと讀む點に差異はない。又句の白楨に到つては愈々妙珍な文字で、大概な者はシロマキと讀みはしないだらうか。これはいゝ加減な字を宛てたに過ぎないものでビヤクシンならば栢とか栢とか木扁があつてこそ想像もつくのであるが白い楨ではどうにも栢の字のつく木は浮んでこないものである。尤も亂暴なのになると白身、白心などの字を宛書するがこれぞ夜店の植木屋さんあたりに通用する

類であらう。では栢とはいかなるものであるか。此の字本來の樹木は支那原産の栢樹、現在吾々がコノテガシワと讀んでゐる木で *Thuja Orientalis* L. ヒノキの葉に似てて面背の區別がなく峙立して人の掌を擴けた様に見え、春花が咲き秋尖端の鱗片をつけた小果を結ぶ。庭園、神社佛閣の境内などに見かける。裏表の區別がないから両面楡葉などといふ。側栢の字を充る。

このテガシハといふ是也。なんぞと説明するから、どつちがどうなのか、さつぱり判らぬ。だが昔のコノテガシハはコナラ、今のコノテガシハは側栢と大體に記憶してさしつかへないであらう。

ついでに述べて置くが、この栢なる木は支那では大した樹である。まづその木扁に白の字を書く事、白は木が白いといふのではない。西を意味する。即ち本草綱目に曰く。萬木皆向陽。栢獨西指。蓋陰木而有貞德者。故字從白。白者西方也。是については面白い説話があるが長くなるから割愛するが、兎も角此の木は枝の末梢が軸は南北を指し葉は両面東西を指す特性がある。

秦皇帝は松を十八公に封じ漢武帝は栢を先將軍に封じた松栢と並び稱されて神社佛閣に聖樹として植えられる。

和漢三才圖會は楡栢をイブキ、栢をビヤクシンとして項を分けて記載し、栢の方には立つた樹木と匍匐したものとの二圖を載せてそれを説明してゐるが、もと／＼植物學上區別はないのである。ビヤクシン一名イブキであつて、

イブキとビヤクシン

これは一本にヒバに似た葉と杉に似た葉が出来る面白い木である。武玉川の句「龍に成」なぞにはその匍匐したものを指したいが、ハイビヤクシンといふ植物は類似であるがこれは自生するもので句にあるものゝ様な園藝品となると、自生品とはよほど變つて來るから、ハイビヤクシンたとも云へないのである。



### 近頃アメリカ異聞集

小畑 自有 浪

(1)

近頃アメリカの海軍志願兵募集のポスターに曰く「轟沈、爆沈のスリルが味へる海軍へ！」

(2)

アメリカでも、日本の隣保組織を眞似て、買けてたまるものかと百軒を單位として、先づ決議して曰く「お互ひに組内のネグロをも愛して動物扱ひは止めませう！」

(3)

自動車の便を失つて、出勤率に激減を來たした或飛行機工場では、労働者街から工場への道路のエスカレ

には盆栽に適するもの多く云々とあるのなぞは、同島のみならず瀬戸内海の島々あたりで岩の間、土の少いところでも成長悪く年を経て倭少、潮風にもまれて枝振りの面白くなつたものがあつて、盆栽向によいのがあるので、商賣にする人々は喰呑を胃かしてこれが採取をするのである。

トター化を論議して居る。

(4)

流石のアメリカも、其れ以來大きな煙突を建てて爆弾投下の猛練習を續けて、さて實戦に飛び出さしたが「煙の處置を如何にすべきや」と、各機から無電のキイを叩いて來た。

(5)

五列縦隊にならんで、樂しげに遠足して居る小學生の前後から、機關銃をかまへたジイメンの自動車隊が駆けつけて來て、「四列にならばせい」と先生を叱りつけて去つて行つた。

大阪あたり、いつの夜店にでも植木屋が運んでくる。

### カシハの語源

河内には柏原(カシハラ)といふ所があり、丹波には柏原(カイハラ)と呼ぶ町がある。そして柏の字は前に述べた様にカシハモチを包む廣い葉たと一般の人が思つてゐる。廣い葉をカシハといふのに意味はあるが柏の字を宛てるのは面白くないこと、前述した通りである。では廣い葉をカシハといふは何故かといふと、昔は食物を廣い葉に盛つたもので、炊葉の謂ひで、飲食を執りあつかふ人を膳夫と書いてカシハデなぞと呼んだ。櫛の類は皆食物が盛れる。ホ、ガシハ、コノテガシハ(此の場合ホナラ、又はホ、リ)ミツナガシハなどいひ、アカメガシハ(楸)には御菜葉(エサイバ)なぞの名がある。又コナラをコノテガシハはとなぜ昔云つたかと言へば、此の木の新葉の出る状は恰も小兒が掌を擴けた様に見えるからだと説明される。だから兒の掌炊葉であつて、それが支那渡來の手掌柏と混同して、柏と櫛とがいつの程にかごつちやになつてしまつたものである。(續く)

# 急性・慢性 化膿症

本剤は品質至純なる二基アルファシアマド劑にして、内服により化膿症の病原菌克服作用を發揮す。

故に、患者の苦痛を速に減らす。痛・發熱等の症狀消滅迅速にして短期間に根元的治癒を促進せしむ

淋疾・婦人科化膿症  
外傷化膿・丹毒・面疔

齒槽膿瘍・眼瞼炎  
中耳炎・扁桃腺炎

包裝 10錠・20錠・50錠 全國藥店に有



製造元

山之内製藥株式会社

東京・大阪

# 錠ルジバルア

OP-17



# 川柳 史界世

(V III)

戸田孤蓬

## (二三) 英國覺醒

### オランダ

無敵艦隊の破れたのはスペインが弱かつたからだ。スペインが弱くなつたのは舊教が前程チャホヤされなくなつたからだ。

宗教熱さめてスペイン熱もさめ

新教だ舊教だどつまらん争をしてゐる時、鬼の居ん間に洗濯をきめこんたのがオランダ。切支丹破天連の法に關りがなかつたので、日本長崎の出島に商館街を作ることを許され、如才なく南方ジャバ、スマトラ、ボルネオを中心に根城を張る。大東亞戦争でをつくりそのまゝ日本軍の手に

歸した地方である。

瓜哇更紗出島へ船がもつてくる

オランダ史濱田彌兵衛の名も見えて

甲比丹謁見今日は經濟學にふれ

利子論の例にオランダ時代など

バリ島の美女總督にさゝけられ

ライデン大學が出来、哲學者スピノザがレンズ磨きのユダヤ人の子として生れたところ。

注文があるとレンズも磨きます

イギリスの場合

一生お婿さんを貰はらずに死んでしまつたエリサベス女王の後、英國はお備ひのゼー

ムス一世に治められ、フランスを真似て國民の臺所を干枯らせてしまひ、惡税連發、遂にクロムウエルの出現となる

淫逸史一卷女王の御形見銀の船ならんてテムズ河のほる

貧乏線チラ〜清教徒見逃さず

噸税磅税王正義派をもてあまし

クロムウエル

王様の首をチョン切つたクロムウエル、何としても我々と具に天を戴くべからざる人物、むべなる哉天罰觀面、その所謂愛國の努力並びに深いと云ふ信仰にもかかわらず、人徳彼を見離し、子孫亦餘殃を受く。暴に絶え兼ねた彼の姿は信長、光秀の關係を思ひ起さしめる。

クロムウエル實利主義とは別なこと

口下手は劍の方にまかせと

玉櫛筒その陰謀もかくされ

王のため祈り明した夜もつゞき

うなづいて野心をすてぬ王子さま

クロムウエル男の仕返し知つてゐる

▼斗風・酒井政雄氏は人生の闘ひに破れ「坐禪でも組まうか背廣擦り切れた」と詠ひ、「何も彼もに負けてなかなか死ねぬなり」と悲痛な叫びをあげてゐたが昭和十七年七月七日午前二時三十分肺患のため、遂に幽明境を異にされた。享年三十有七歳法名は釋政致。

▼氏は明治三十九年九月六日富山市稻荷町五十一番地に出生。

▼昭和三年四月一日、阪神電鐵運輸部に勤務、昭和十六年五月八日退社尼崎市難波南通四丁目九十五番地の自宅で闘病生活を續けてゐた。

▼氏は無口ではあつたが、いつぱんざなところをもつてゐた。正義感が強くて常に利慾の外に生きやうとして多難な道を歩いてゐた。従つて、お追従を極端に嫌つてゐた。趣味としては川柳以外に登山に讀書位なものである。

▼氏が川柳に手を染めたのは（川柳雜誌社梅田支部同人）昭和十一年頃であらう。昭和十四年三月不朽洞會



## 斗風逝

### 斗風句抄

坐禪でも組まうか背廣擦り切れた何もかもに負けてなか〜死ねぬなり子が出来るまでと働く女工さん陽の縁に子の鳩笛を父がふく保険金長女はたちの頃思ふまた趣味を變へた男をさみしく見いけすかないのも一列の中に居る電話にも弱者の聲はほそくなり代筆で來た請求書にちとあわて城下街のかげなくナツパ服あふれ女工さんの惱み子供があつたのか配給の米へ子供も口を出し四十に近い樂書金的事モーニング知つた巡査にひやかされ

戰略の虚偽はモーゼに説びながら

八徳の壁ちて眉間の深い皺

### 鐵騎兵

クロムヴェルに率られて勇猛に戦つた騎馬武者鐵騎兵は神様の申し子みたいな清教徒で酒は勿論、賭け事一つしない。芝居もみない、堅い時代のあとに柔い時代がきて、

彼等の残した氣風業績は永くジョンブル氣質化してしまふ

偽善など思ひもかけぬ鐵騎兵

鐵騎兵無駄の効用など知らず

やは肌は匹夫にまかず鐵騎兵

讚美歌の節で惚れ歌こしらへる

亡目ミルトンの「失樂園」

鑄掛屋行商のペンヤンの「天路歷程」がこのイギリス人の中に残る。

アダム、イヴ不幸などとは

かいてなし

旅日記自分を神におきかへる

### 航海條令

伸び切つたオランダ、伸びようとするイギリス、その衝突が航海條令となる。イギリスに輸入するのは全部英國

船によるべしと云ふ御布令、今まで甘い汁を吸つてゐたオランダに締出しを喰せる。オランダのトロンプ、イギリスのブレイクなど云ふ海賊の兄弟分然たる海將が鎗をけすつてゐた。白星はジョンブルへ海洋制覇のバトンはオランダからイギリスへ。

航海條令相手のことは考へず

(二四) 佛蘭西霸業

ルイ十四世

團栗の背比べによる平和はその一人が團栗でなくなつた時破れる。弱くなれば袋叩き強くなればちごこまる。

シーソーのどつちも負けぬ重味にて

ルイ十四世は五歳で位にいたが、とりまきがよかつたので、知らん間に國が強くなつてゐた。リシュリーと云ひマザレンといひ揃ひも揃つた

高僧出身

幻君はおいた賢相雲のごとお經をは忘れて地圖に朱を入れる

三十になるやならず朕の國家を親政し出したルイ十四世

元來の派手好きがヴェルサイユ官殿を作り、佛蘭西の喜劇悲劇の舞臺を拵へる。全ヨ

ロツバは彼の後塵を拜して、フランス語が流行語とまでなる。

商業主義の所産は光る鏡の間

ムシユ、メルシだけを覺えて巴里へ来る

外交外征

力にまかせて四隣を征するは覇者の常道、ネーデルラント、オランダ、イスパニヤ、力あまつて想たらずと云ふ結果もある。お山の大将の無邪氣さを何時迄も失はない。海軍を急造すると使つてみたくてたまらないが成金根性。

兵數をちらりと見せて軍をひき

砂の山砂利の山でも大将さ分限者の子供は剣にもいはせ

賢者は黙し、弱者は媚びる弱味が見えたらかゝつてくる隣組みんなルイさまルイさまさま

ルイ朝文化

謂ふ所のバロツク時代、ルネッサンスの人間完成の理想の前に忽然と立ちはたかつた暴君にしばし唯々諸々。いたすらなる王侯裝飾係。

ヴェルサイユ鏡の奥の虚榮の市

四月二十一日辭職

轉業へ鶏を飼ひたい妻の夢

浪人の靴を磨いてあてもなく

感情を出しきる顔の哀れなり

自轉車はひかる茶の花はるがすみ

長男次男の鼻の低さを見飽きぬ日

優越をなにかに感じ夫人生き

三ヶ日過ぎて百圓札くづす

出鱈目の夫婦へこども生れたり

ユダの血をうけしか今日も檢舉さる

四十代近し理想を日々崩す

この街のよさに長男次男生み

善後策さて金のないものばかり

淋しい日言葉すくなく人を戀ふ

悲劇とは知らず化粧をしてゐたり

しほれたる後ろ姿に風のふく

偶然を信じるような日がつゞき

酒のんでうれしや野心まだ捨てず

双葉山取りまく群に拘摸がゐる

夢多き男が今日も樂器抱く

猿の瞳にも金あるひと見えぬなり

淨瑠璃の戀へアイロン置いて聞き

炭三俵置けないわが家冬せまる

氣短い父にあきれた男の子

卷尺を伸ばしたままメロン喰べ

陶枕酒もお強き五十すぎ

父に演ふかせて夏をよく遊び

妥協した自分に腹が立つ日也

窓へくる鳩へもカルテ見せたき日

陽があたる店で利潤を聞かされる



までが見透しをつけたからであらうが、近頃は果してどんなものであろうか。  
 乞食するにも、見透しが利く、利かぬで餘程影響があるらしいのが面白い。

例へば近頃の買物行列である。少い物と多い金との關係から、思ふが儘に買物が出来ないのは判り切つた話である。長蛇の列を作つても其半分にも行き渡らぬと見透しがついたならば、サツサと引揚げる可きであらうに……。

古い處では、關東大震災の當時の事である。

近畿地方から疊、建具をドンドン送りつけたまでは餘程機敏を唄はれたのだつたが、東京の間取りは關西のそれに比べてやゝ狭いので其體が大き過ぎたり、建具が高過ぎたりして思つた程に賣れなかつたと云ふ實例もあつた。これ等は、たとへ見透しを附けて見ても、其見透したるや中々當らないもので

ある事を雄辯に物語つて居るのである。

近頃「大東亞戦争の見透しは如何たろう」などと云ふものがある。これ程間拔けた見透しは古今東西に涉つて、又とあるまいと思ふ。何故なら戦争に勝つか、敗けるかナンテ凡を論議の外であつて、我皇國は徹頭徹尾戦ひ抜いて勝ち抜くより外に手が無いのである事を忘れてゐるからである。

素々先の見透しナンテ當るモンぢやない。況んや曠古の大戦をやである。

昭二七二〇一三稿



青春の頃の日記をいとはしむ女房の日記女房の歌がありペン持たまゝで日記へ寝てしまふ陣中の日記蠟燭消えかゝり新妻の日記見合の日が消され先生に見せる日記へ兄の智恵夜業から歸へり日記を付と寝る平凡な生活餘白のある日記日記にも〇〇と書く癖がつき血で染めた日記へすでに覺悟育兒日記あくびの数も付けても悪口もあるなり妻の日記帳別段に隠さなくともいゝ日記感激の八日の日記ふり返り此處からはお召に征つた日記帳子の日記戦果もさす書いても俺もよくやつたんだなと古日記遺された日記覺悟のほどを知る日記帳空白が続く平和な日看護婦の似顔も描いた日記帳蘭病記神經質な字が並びあの頃の父の日記を娘が笑ひ郷愁も漸く慣れた日記帳頑張り足らない奉戴日の日記勇ましい日記レキシントン沈み勝つ國の日記にゆとり見受け日記今日餘白に戦陣訓を書く新聞の寫眞も貼つてある日記組長の日記に今日は芋のこと増産の記録を残し日記帳吾子の日記叱られたこと書いて日記帳二月以降はメモとなり押花が春のまんまにある日記別々に日記を付けて共稼ぎ腹の立つ事を日記に書いて寝る人ごとやないよ日記の書かれま

しげを 鐘生 蛙柳 小雅子 青洞 晶平 英雄 青々子 猪三郎 彌生 春童 風情 好平 正二 不城子 伊太丸 三子丸 障風子 神盛 一夫 國舟 初人 蝶志一 世之 十四次 照路 茂芳 翠太 惡源 林業子 丸太 柳太 治光 男

その當座きれいに書けても日記繰り返し読む日記帳なつかしく日記帳入社の時を偲ぶなり(佳)陣中の日記支那語も交々書き(同)忙しい様に日記のなぐり書き(同)母若し育兒日記を買つて来る(同)よく働らいたあの頃の日記帳(同)何處へも置いとく妻の日記帳(同)押花のある日の日記読み返し(同)子の方が頭がよいぞ日記帳(同)良いことが續く日記書き初め(同)肉弾となる日の日記した(同)日記帳讀きたらと箇所が開き(同)繪表紙の趣味も十九日の日記帳(軸)日記帳女の嘘は美しい

利美 春生 一作 俊數 祥月 無哲坊 喜樂 東狂子 カズエ 若菜女 詩朝 潮花 千斗 周峰 滿潮

ザンキリ頭で  
 ない以上  
 柳を  
 通して  
 スツキリと……

伊豆豆樁 ドーマポ  
 園芳彩楓大 舖本 油香樁豆伊



### 廻轉椅子

★朝夕はもう寒い。その代り夜が長くなつたので、しみんと句が味へる。句作にもいゝ季節になつた。しかし南はまだ暑いのではないかと思ふし、北はもう雪や氷にとざされてゐるのではないかと思ふが内地に於ては想像することも出来ない。たゞ／＼その勞苦に感謝のまこと捧げるばかりだ。それにつけても本誌の届くのを千秋の思ひであてくれる人たちのために大いにファン張らなくては駄目と思ふ。本誌も夜を日について編輯をいそいだ。

★柳界の至寶「武玉川研究」は本誌で百二十四回發表し續けて来た。歴山、東魚、省二の諸氏の勞を思へば仇やおろそかには讀めない。

★續稿としては柳樂氏の「草木徒然」孤蓬氏の「川柳世界史」が、その畑の人たちをよるこぼせてゐる。

★雜文「電車の中で」は白面人、夜王、綠葉、不水、香林坊の諸氏を煩はした。車中の哲學や感想で興趣の深い好讀物である。その他の雜稿では、自有浪氏の「近頃アメリカ異聞集」に香林坊氏の「宮寺行」などがある。

★本誌は締切厳守と記事幅帳のために、次號へ割愛したものが多し。諒とされた。

★選刊を取戻すために、私の大和行を前號同様見合せた。そして「初等川柳講座」と「銃の匂ひ」の續稿だけにした。多忙な私にとつて、これだけでもかなり重荷だつた。久しぶりに徹夜した。本誌以後刊行も軌道に乗ることになつた。アートの不斷の努力と朝鮮から戻つた石鹿氏が編輯を手傳つてくれたお蔭である。

日川協幹部の併句部門への轉換が一つのセンセーションを捲き起してゐる。幹部が總辭職でもしなければ一寸收拾のみちはあるまい。

塊人氏が「東亞川柳」の八月號に「文學報國とは何か」と題して啓蒙の筆を執つてゐるし、不浪人氏が「みちのく」の九月號に「川柳系圖にこだはる」の一文を草して日川協の幹部の人達に一矢を酬ひてゐるし清水米花氏も又「みちのく」九月號に「百年の計を樹立せむ」を執筆して日川協幹部諸氏の反省にこれつとめてゐる。

○ 上述の如く火の手は寧ろ内輪から上つてゐるにもかゝらず、久良俊氏を頭目として雀郎、三太郎、周魚水府の面々、何れも併句の落胤でもあるかのやうな顔をして遂に併句の遺産にありついたのである。「泣く／＼もよい方をとる形見分け」か。

○ 久良俊氏の門下が、僕の書いた記事に久良俊氏に見せたところが、路郎のいふことは正しいと云つてゐた。

うだが、その久良俊氏も正しくない方へひきずられてしまつた。久良俊氏も文老ひたり突である。

○ この醜態な現實に直面した日川協の人達で、城を枕に討死する者が果して幾人あるであらうか。

○ 僕はいくら貧しくとも、柄井家を護る、そして川柳の旗は覺れても放さない。正義の士よ來れ！  
(路郎生)

## 柳界展望

### 川協のページ

催

▼本社句會は十月三日午後六時半から御津八幡宮で開催▼松坂俱樂部生路郎川柳講座は四日、十八日午後二時▼有恒俱樂部川柳講座は七日、二十二日午後五時開講▼阪大川柳會は二十三日午後四時▼大阪警察病院川柳會は十五日午後四時▼尼崎住友産報川柳會は十四日午後七時▼川・維神津支部創立一周年記念川柳會は十二日午後六時▼以上何れも路郎師出席▼阪神産報川柳會は二十一日午後六時西宮産報會館で開催▼川・維下關支部句會は十一日市多樓居に於て開く▼川・維小郡支部句會は十八日鐵道俱樂部に於て開催▼川・維尼崎支部句會は九月二十六日午後六時尼崎昭和荘で開催

### 消息

▼岩崎柳路氏(不朽洞會員)は蒙賜寫眞聯盟主催の大東亞資源館出品懸賞寫眞に懸賞し「毛皮の搬出」(六

枚組寫眞)、第一席に入選▼浪玲之介氏(不朽洞會員)函用で上京中の同氏は十月十日熱海から書を飛して「……豆萩先生のトンガラシやちやないが、日本橋區本町三丁目には猫



イラズビルディングとなん呼びける貸ビルありていと心寒ふ見上げ待りけりです」とある▼奥村丹路氏(不朽洞會員)の令嬢美穂子さんは豫て入院中であつたが十月九日全快退院された▼吉田水車氏(不朽洞會員)祝滿洲建國十周年の句を寄せられた「高梁のささぎもものななくのびる」▼北垣神風氏(大阪)は豫て和歌山陸軍病院に療養されてゐた

に關しての放談である。

### 轉居

### 社の回覽板

★不朽洞會新會員發表表 (香林坊氏紹介)  
大阪 宮田 不二氏  
同 岡島 嶺泉氏  
同 乙谷 乙平氏  
同 伊古田伊太吉氏  
同 池水 湖心氏

### 麻生路郎著 新川柳評釋

定價○・八〇  
本筋の川柳で一粒選りの名句を蒐め、その一句一句に、不即不離の評釋がしてある。

### 藤村誠一著・序文 麻生路郎・百田宗治 隨想集 詩人複眼

定價一・〇〇  
川柳眼で書かれた隨想集。その大半は高麗亜細のペンキムトで、川柳雜誌に發表されたもの。

### 麻生路郎著・柴谷半舟書 果卵の遊び

定價一・〇〇  
名句に名評釋がしてあり、駢例となる句が澤山蒐めてある。漫筆三十二葉挿入。

### 戸田孤篷著・麻生路郎序 川二千六百年史

定價○・九〇  
著者一人の創作・諷刺史川柳の安端をゆく。

### 街の雜音(實切) 空(實切) 人の一代(實切)

堀市出島海岸 通二丁一八二

### 不朽洞

振替大阪三〇三九二番

所行發 不 朽 洞

いのちある句を創れ



投稿清規  
用字は原形用字、文字を正しく  
期日及場所記入、綴切は毎  
月廿五日、投稿は本社宛

### 本社十月例會

十月三日 於 御津八幡宮

本社十月例會が三日夜六時から御津八幡宮に於て開催された。新顔の出席があり、そこに川柳の社會化が一步進んでゐることを示唆するかの様に思はれた。路郎師の講話「何故彼は落伍したか」は新しく川柳に手を染められる人たちのために準備されたかの様であつた。川柳界から落伍して去つた人々の原因が奈邊にあるかを検討して、前年の轍を踏まざる様にとの親心がにじみ出てゐたのは嬉しい極みであつた閉會は午後九時(石鹿)

#### 出席者(順不同)

路郎・葎乃・綠乃・美奈子・靜江・石鹿・勢三・勝重・豊達・かほる・帆船・鐘生・湖心・潮花・雅美・紫香・不二・蒲明・香林坊・幽王・孤舟・翠芳・孤舟・同蒲・綠風・恒明・三司・鮎美・栗・青與史・九一・文雄・彌生・羽生・夢外・夜王・竹莊・一笑・千斗・豆秋・外道・吐空・靈光・甲東アート

#### 兼題「判取帳」 路郎選

判取帳中に優しい女文字 湖心  
判取帳筆で書かすも御家柄 文雄  
判取帳筆の判取を繰るあはてやう 栗  
御主人おひま判取帳の轍のはす 孤舟  
判取帳筆のある字で書いて去に 紫香  
判取帳豫算の高を越えてゐる 竹莊  
判取帳投げ出しといつて腰を掛け 翠芳  
判取へ四角な文字も丁稚なり 九一  
判取帳汗を入れてく暇もなし 綠葉

判取帳女中に我が名覺えられ  
判取帳轉業近き灯に光る  
一金代用ペンはあきまへん  
息子はんが来たといふ判取をみせ  
判取帳親方の名で書き終り  
判取をすましてからの世辭を云ひ  
判取帳これ頼むと投げ込まれ  
新宅は判取帳のない生活  
判取帳インキを無駄に三度振り  
商人にまだなり切れぬ判取帳  
判取帳のストックだけはもて餘し  
判取へ女小さく認印捺し  
③の金額で載る判取帳  
判取をしいしい容態きいてくれ  
黒皮の判取帳も遠い夢  
洋装は判取取つた顔でかき  
判取帳こゝらあたりが山だつた  
そんな事無いと判取帳を見せ  
轉業へ判取帳よ何處へ行く  
手くらがりのまゝで判取してしまひ  
判取帳仲仕の汗の落ちたあと  
戦死した人の名がある判取帳  
古色蒼然と判取帳と座し  
猫をはめながら判取帳へ書き  
判取帳五日拂ひへ字がにじみ  
判取の筆蹟仲居とは見えず  
判取帳不足聴き／＼捺して去に  
判取帳世間話で書き終り  
不景氣の波にも乗つた判取帳  
あと一軒来れば片づく判取帳  
判取帳となりの栞と違ひすぎ  
畫線の下へ判取持つてゆき

文雄 妹の客へ各曲かけてやり  
孤舟 名曲の拍手にびつくりして起きる  
不二 名曲のすんだ拍手へ目が覺めて  
栗 名曲へ女中も隅で聞いてゐる  
青與史 名曲に隣子がすこし振ふなり  
九一 名曲をきいて用事を思ひ出し  
香林坊 名曲のどうのこうのと少し弾け  
栗 沈黙の中に各曲終るなり  
不二 酔ふとれば皆各曲となつてくる  
夢外 名曲の前へみんな座る也  
小城子 ベトウエンかけてゐる獨り者  
三司 名曲がすんで背中汗を知り  
帆船 名曲へ父はねむつてしまふなり  
勢三 名曲へたつたふたりの暮しなり  
勝重 名曲へ海からお月さんが出る  
恒明 名曲へ海からお月さんが出る  
かほる 名曲へ海からお月さんが出る  
幽王 名曲へ海からお月さんが出る  
栗 名曲へ海からお月さんが出る  
一 名曲へ海からお月さんが出る  
青與史 名曲へ海からお月さんが出る  
孤舟 名曲へ海からお月さんが出る  
豆秋 名曲へ海からお月さんが出る  
かほる 名曲へ海からお月さんが出る  
勢三 名曲へ海からお月さんが出る  
鮎美 名曲へ海からお月さんが出る  
孤舟 名曲へ海からお月さんが出る  
青與史 名曲へ海からお月さんが出る  
石鹿 名曲へ海からお月さんが出る  
帆船 名曲へ海からお月さんが出る  
紫香 名曲へ海からお月さんが出る  
三司 名曲へ海からお月さんが出る  
美奈子 名曲へ海からお月さんが出る  
羽奎 名曲へ海からお月さんが出る  
幽王 名曲へ海からお月さんが出る  
同 名曲へ海からお月さんが出る  
路郎 名曲へ海からお月さんが出る

#### 席題「仲よし」 五選

仲よしと廣い庶敷に座らされ  
仲好しの英靈靜かひさの上  
仲よしの影が重なりあふてゐる  
嫁もらふ話仲好しまた言はず  
仲好しの一人泳ぎが出来ぬなり  
同窓會仲好し既に母と成り  
プロットにベストにいつも二人居る  
仲好しが泣きに來てゐる磯の風  
仲好しが皆そろつた春の旅  
仲好しの叱つてくれるのが嬉し  
仲好しになつてお酒が強くなり  
仲よし子よし勇士の遺児に友殖える  
仲よしと杯を重ねて戎橋

#### 席題「表札」 孤舟選

こゝかいなと表札を替へて  
新家庭らしく表札光つてる  
表札と思へぬ程の子澤山  
同姓の表札も一度ふりかへり  
表札の上に乗つてるわらほこり

表札も古し長屋に二十年  
表札の胸もたしかな書道塾  
表札へまさか獨身とは書けず  
表札もちいさく娘の名で通し  
表札が斜になつた明ける朝  
引越しの先づ表札がはげざれる  
表札を友に頼んで棚をつり  
同居解消表札をガンと打つ  
組長になつて表札かきまほし  
表札は名刺のまゝで共稼ぎ  
表札へ士族とかいて茶店する  
襲名をした表札の古ひやう  
表札へ父の焚火のくすほりぬ  
表札のはつきり讀めぬ舊家なり  
表札を見い見い露路につきあたり  
軍神を訪へば表札女文字  
今日佳き日表札にある旗の影  
一週忌すんで表札やつとかへ

#### 席題「智慧」 鮎美選

兒の智慧に未頼もしと親心  
智慧熱ですと往診歸るなり  
智慧のある子ほめられてやせてゐる  
智慧くらべまだとけませぬ秋の夜  
子の智慧がふえてにぎは夕の膳  
智慧のない男にされて豚を飼ひ  
悪友の智慧を借りて生ビール  
孫の智慧はめめてる祖母の顔丸し  
新開の智慧は遠慮もなくしゃべり  
いゝ智慧の出ぬうち鏡子空になり  
借りて来た智慧とは言はぬ見合の日  
人様の家で我が兒の智慧を知り  
智慧ばかりあつて其の日は樂でなし  
智慧よせた慰問袋が美しい  
うらのうらみとほす智慧をまきい  
宵祭り智慧のある子に手を曳かれ  
智慧ついてきた子つづらな繪籠な贈





阪大柳川會

九月廿五日

利生報

各 地 柳 壇  
瀧かけかけて中風は何か食べ  
お彼岸の歸り中風の灸を搦え  
手紙だけ見れば中風らしくなし  
披露宴の花を中風は見せられる  
後添に來て中風の世話をする  
不自由と云へば中風の氣にさわひ  
飲めるだけ飲んで中風は不足云ひ  
戀人が中風筋とは面白し  
中風だかまた戸主であるつもり  
中風の癖に短氣な口をきき  
あの人もとうとう中風になつたげな  
中風が二號の家で出たのなり  
中風の因果なことに口達者  
炬燵から振る來配は中風なり  
中風の見舞いっしか薄きかり  
中風になりまつせと徳利とりあげる  
中風を見送ればと云ふ遺産あり  
えらい始やつたが中風にはかてず  
中風の父あり街で媚を賣る  
中風ですと多醫あつさりかたづける  
中風で寝て居て北濱張つて居る  
馬鹿にするなど中風思へども  
回覽板中風が奥で返事する  
もう一度中風文樂見る氣也  
死にたいと云ひ中風生きのびる  
打水を突然やめた蟻の列  
此の家の蟻を往診見逃さず  
ちと蟻にならへと午睡叱られる  
十疊の廣さに蟻が一つ居る  
風吹けば蟻は吹かれたまゝに喜び  
蟻に似てサラーマンの列がゆく  
休閑地おつゆの實だけやつとこれ  
保険屋の笑ひし蟻のとけし  
よさうきときやと妹序でに叱られる

耳鼻科もう患者の方からきりあげる  
中風は斯の如しと叔父おしへ  
利生

松坂俱樂部川柳會(大阪)

九月六日

白面人報

板ばさみさあ困つてる電話口  
板ばさみ女將騒がず猪口をあげ  
板ばさみ女房は俺の肩を持ち  
恩人に義理立をして轉出し  
社長へは上司の指圖とも言へず  
板ばさみ貴方のために別れる氣  
法と情若い檢事はなやみ果て  
板挟み婿もこんどは腹を決め  
ともかくもその母は母の方をたて  
上玉と見て口入屋吸ひつける  
口入屋苦勞の足りぬ掌を見つめ  
能なしと口入屋にも見すかさず  
遠縁の娘を連れて來た口入屋  
口入屋そのお願でと思へども  
先方のくせは知つてる口入屋  
柱廊の昔と違ふ件名簿  
口入屋軍需でネーと取り合はず  
家政婦なら間に合ひますが口入屋  
給金は任せてほしい口入屋  
御めみえの口書書いて張る口入屋  
口入屋へ來て母の願父の願  
口入屋事務所までしかつてこず  
汽罐室裸のまゝで擧手の禮  
双葉山雲霞影に見えて立ち  
錢湯であなたの丙種うけとれず  
眞中の裸が僕と云う寫眞  
暑いと裸で過ぎた日を忘れ  
行水の子だけが夕飯あとにされ  
庶務課長笑つて嘘も聞いてやり  
會社から呼出しが來て嘘がばれ  
金借るに父を危篤にしてしまひ

檀家總代和尚の嘘を聞いてやり  
嘘を吐く方も業ではない節季  
婿曳の待たぬと云ふも嘘のうち  
兄は五ツ嘘や嘘とだまされず  
嘘云ふたことを上手に云ひ直し  
大阪の屋根あつたで嘘をつく  
悪友は嘘のコーチもして呉れる  
そうかなあ僕は嘘だと思ひ度い  
嘘ついた辻をうつかり曲りかけ  
雨が來てチト掃き殘す大掃除  
大掃除返さなやならぬ本が出る  
大掃除妻の意見の通ること  
大掃除お酒の瓶の目立つたり  
大掃除清んで小童筒ほしくなり  
大掃除ついでに顔も入れ替へて  
大掃除釘ぬいて打ちぬいて打ち  
大掃除の西瓜と書いた出入帳  
大掃除の日の始はよく動き  
大掃除荒神様も下に降り  
大掃除蜘蛛の習性など覚え  
市電色々掃除の街の中をすぎ  
内の疊いつも汚ない大掃除  
特配のビールを拜む大掃除  
大掃除時計の位置を換へてみる

九月二十日

有恒川柳會(大阪)

九月二十日

鏡々報

石鹼の無駄知らされる家庭欄  
出張へ石鹼半分切つてくれ  
泡立ちが匂ひがどうは前の事  
へ石鹼は私持でと背を流し  
石鹼は工場の父にとつて置き  
石鹼はないか〜と里歸り  
風呂歸り石鹼つまむ様にさげ  
アル中は配給日まで待つて居す  
アル中も列に續いた繩腰廉

酒呑みを叱るに伯父を例にひき  
アル中の浴衣へ泥がついたまゝ  
アル中で神と人との間に居  
子のお召しアル中の父酒を飽ち  
アル中の父へ娘は嘘もつき  
アル中の妻諦めの酒をつぎ  
酒の氣が切れると人が變つて來  
戦時下をアル中狭く〜生き  
由緒ある家にアル中獨り住み  
答禮へ倍額もするものが來る  
大物の答禮汪氏恐れ入り  
部隊長慈愛の目にて禮を受け  
將軍はよし〜と擧手の禮  
答禮使菊の香りをなつかしみ  
生徒らが頭を上げる頃に下げ  
答禮の手はゆる〜とあげられる  
香奠の返し獻金するときめ  
答禮使元大臣を拾ひあげ  
出無精の心ならずも禮を缺き  
知らん顔してたと近眼なじられて  
校長さん朝日の中でおじぎうけ  
新任のきつちり生徒へ帽子とり  
答禮使伊勢をすませて鹿島立ち

# 東回 スピーサ

ワイシャツ  
婦人服地

其の他

大阪北浜二丁目片倉ビル  
電話北浜(2)六三六六番(4)

# ママカルシウム錠

妊娠としての大切な責任はカルシウムを補給して諸病を防ぎ、子宮の収縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

梶林醫學博士 推奨  
片瀬醫學博士 監査



大阪道修町 和田卯助商店



のた  
めに

片瀬醫學博士述  
「安産のために」冊子呈上

## 徐州川柳會 (徐州)

八月二十三日夜 於民團樓上 ひろし報

親切な隣に困る若夫婦 ひろし  
點呼場生れ甲斐あり丸坊子 多々良  
右向けを左に向いた點呼場 のりを  
未教育はりきり過ぎて無邪氣なり 八筋樓  
散歩して序の用も足して来る 多々良  
行き戻り隣の人と二度出會ひ 鳴人  
散步にも國民服は胸を張り 八筋樓  
十六時半よと母をまごつかせ 雨町  
會合の十九時念を入れて言ひ 同  
隣組きつちり捕ふ十八時 ひろし

松坂俱樂部麻生路郎 川柳講座會員を  
募る。大阪市南區日本橋筋三松坂屋百貨店七  
階松坂俱樂部受付へ申込みたい。(幹事)

## 住友有信川柳會 (尼崎)

十月十四日

大デマと知らず電波はのせてゆき 風報  
彌邊談話十八ヶ國語でばらまけり 治  
名將の放送録音だつたのか 仲童  
交換放送わからぬままで開いてゐる 客與史  
受付の眼は汗漢を 悟りぬき 同  
南方のニュースに伴思ひやり 元

運命の子よサーカスに育てられ 柳報  
吉本の専屬も居る隣組 湧三  
専屬ハウスキーパーの役もする 余城  
あんなの専屬たつせと如才なし 五柳  
東西止れこれこそこのお婆さん 吉郎  
青信號逃げたやうに市電行き 同  
信號はどうあるとおばあちゃん 同  
急診へ赤信號のまどろしく 吉郎  
信號注意早いところを子は渡り 同  
成功せりの信號のみで歸還せず 正朗

## 警察病院川柳會 (大阪)

九月二十六日

評判のいゝ受付が嫁くと云ふ 客與史  
受付は編物を手に應對し 路風  
署の受付目の色變へた人も来る 與志美

信號の赤で女を見失ひ 白路  
信號を見たかと巡査せまるなり 正柳  
一分の信號待てぬ都會人 青柳  
青信號ぢや失禮と急ぐなり 雨盛  
茫然と椅子には居れど壓へてる 湧三  
背景もなくその切味や物凄し 同  
貫祿をつける手段が無口なり 余城  
貫祿も出来たがヒスを押へかね 同  
貫祿を見て双葉は受けて立ち 同  
貫祿と云へば大きな椅子であり 青柳  
糞症は宿の浴衣の裏を着る 同  
喰べて来たんですと糞症必死なり 正朗  
糞症は人前もなく喰しい 柳一  
汚なかりもせず先生流行ること 湧三  
猫までが其糞症を知つて逃げ 吉郎  
糞症やみ 醫者の來たあと消毒し 五柳  
糞症やみ これも一つの自慢です 雨盛

支 部 と 幹 事

Table listing various branches and their members, including names like 道頓堀支部, 函館支部, etc.

Table listing names of individuals, likely members or staff, such as 主幹 麻生路郎, 贊助員 池澤樂居, etc.

Table listing names of individuals, possibly related to the organization, including 古川風竹, 戸倉善天, etc.

Table listing names of individuals, including 岩崎山石, 古川麗花, etc.

Table listing names of individuals, including 北川春集, 布崎方正, etc.

Table listing names of individuals, including 岩崎水虹, 阿川文夫, etc.

募 集

第二十卷 第一號課題

十一月廿日締切 (十句以内)

第二十卷 第二號課題

十二月廿日締切 (十句以内)

第二十卷 第三號課題

一月廿日締切 (十句以内)

募集

組 合 大西八步選

不足 北川春集選

每號募集 (毎月五日締切)

近作柳樽 (甘吟) 麻生路郎選

川柳塔 麻生路郎選

各地柳壇 (會報)

文章 (評論研究感想時行漫文漫書)

投稿規定

- List of submission rules including: 投稿は本社發賣の投句用箋、半紙又は...

川柳雜誌 第十九卷

規格外B列り號 每月一回一日發行

定價 一册 金三〇錢

半年 金一〇八錢

一年 金二一六錢

昭和十七年十月廿五日印刷

昭和十七年十一月一日發行

本誌廣告に御用の節は川柳雜誌社

發行所 川柳雜誌社

東京市神田區淡路町二丁目九番地

電話 三三〇三

配給元 日本出版配給株式會社

★每號、戦線の勇士に送られた方は...

送住者名氏

# セ・ミ・ミ・ノ・ハ・タ

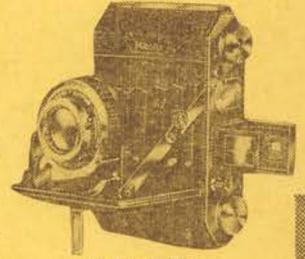
代表的國産カメラ

プロニー  
16枚撮り

II型 F4.5付  
¥ 117.00

F3.5付  
¥ 141.00

距離計  
¥ 21.00



(カタログ呈  
要郵券十銭)

## 浅沼商會大阪支店

大阪市南區順慶町四丁目  
電話船場905・1905・1396・5095番

ガラス壘代用

# 紙容器

金屬代用紙罐  
紙コップ

丸形・角形・小判形・

組立式各種・薬品・食

料品・菓子等の容器と

して最適

大阪市住吉區晴明通一丁目四〇番地



## 二葉屋商店

電話事務所用 天下茶屋 (五八〇三番  
工場用 同 五八〇四番)

## 鍊成コース

御陵巡拜コース

楠公史蹟コース

岩湧山コース

お菊松コース

紀泉アルプス

大阪府指定

南 海 電 車

川柳雜誌 第二二六號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可 (每月一冊一日發行)  
昭和十七年十月廿五日印刷 大阪・昭和十七年十一月一日發行

細菌性・化膿性疾患に

# テラポール錠



感冒・扁桃腺炎・中  
 耳炎・尿路疾患・丹  
 毒・肺炎・齒槽膿漏  
 婦人科疾患・面疔・  
 その他細菌性疾患に

定価 金三〇銭 發行所 大阪府大阪市東区